

SECTOR

ジョン・メルヴィル Collaborative Economics

産業界による協働

協働することでより強くなる

Working Better
Together



産業振興・雇用創出・若者定着の好循環を生み出す戦略

千葉県COC+ シンポジウム



大学と共に創る 明日の千葉県

これは、2016年10月11日、千葉で行われた
千葉のCOC+に参加する大学の合同開催による
シンポジウム「大学と共に創る明日の千葉県」
の講演＋パネルディスカッションの記録である。

目 次

基調講演 産業界による協働	----- 1
質疑応答	----- 19
パネルディスカッション	----- 23
千葉大学の COC+ の取り組み	----- 24
敬愛大学の COC+ の取り組み	----- 30
千葉工業大学の COC+ の取り組み	----- 35
千葉科学大学の COC+ の取り組み	----- 51
聖徳大学短期大学部の COC+ の取り組み	----- 57
木更津工業高等専門学校 の COC+ の取り組み	----- 63
ディスカッション	----- 71
付録	----- 85

産業界による協働 協働することでより強くなる

ジョン・メルヴィル / John Melville
Collaborative Economics(米国) 共同代表

30年以上にわたり、人材育成や地域おこし、地域イノベーション、市民の生活の質向上において、アメリカ国内外で産・官・学の指導者を支援してきた。産業主導型の地域形成の権威として知られる。米国スタンフォード大学政治学部卒。

SECTOR PARTNERSHIPS
Working Better Together



私が伝えたいこと

COC+事業は非常に重要な事業だと思っています。これは、地域全体の方向性、軌道を変えようとする試みです。唯一の方法は、協働することです。私のスピーチタイトルは「Working Better Together」で、協働することによって、より強くなるということです。大学、自治体、企業が連携し、そして今までやったことがないような形で協働する。そしてその結果、みんなが正しい方向に向かうというメッセージがあります。COC+がスタートしましたが、その事業をこれからいかに強化することができるか、について話していきたいと思います。

昨日、私は千葉の地域の視察をさせていただきました。本当に素晴らしい経験でした。そして、私は、異なるさまざまな地域をみることによって学ぶことができました。非常に多岐にわたっており、文化も豊かであり、また自然も豊かであるということを知りました。また、人々も非常に多様でした。視察を通じて、私はそれらの将来を変えることができるのだということに自信を持つことができました。

それでは、まず、みなさんに、未来を想像していただきたいと思います。例えば、今から4年後、COC+事業が大成功したとします。そして、みなさんや、その他の方々が互いに連携し、今まで以上に強力に協力しあうことによって、たとえば強い製品が成長していくこととなります。千葉地産の製品が日本のみならず世界に広まっていきます。

私はカリフォルニア出身です。4年後、私は千葉の製品が、私が行くカリフォルニアの店舗に並んでいることを期待しています。もしそうなれば、グローバルブランドとなったわけ

で、成功したということになり、雇用の創出もできるわけです。そのためには、一つの製品だけ、それぞれの地域からの製品だけでなく、みなさん全体で何ができるかということです。一連の製品を生み出すために、協働が求められます。このような製品が国際的に知名度を上げるということだけではなくて、若者が新しい事業を始めたり、農家で働いたり、その農産物を生産したりするようになる。そして、家族が地域に引っ越してくる、千葉に戻ってくる。都心で教育を受けたような人も千葉に再び戻ってくるようになるかもしれない。

なぜかという、ここがチャンスのある場所、フロンティアだと考えることができるからです。都心で学んだスキルを千葉で適応することができる。それは、ここの環境がオープンだからということです。新しい企業に対しても、方法についてもオープンであるということです。大学は、そういったトレンドを生み出すことができます。プロジェクトベースの学習を通じて、学生に新しい方法を教えたり、起業家精神を教える。そして早い段階から学生を開花させるようにした方がよいでしょう。現在、いろんなプロジェクトが取組まれています、それがビジネスのスキルにつながるようになります。そういう形で学生たちは教育を受けることになるわけです。

COC+の成功は、スポーツとか、観光とか、食べ物とか、自然とかだけではなくて、すべてのものを求めて千葉に来るようになることです。千葉で経験ができるからやってくるといことになります。ユニークな経験、さまざまな属性、さまざまな要素があり、その結果、人々が千葉に長く留まる。そして多くのお金を落としてくれる。そうするとさらに雇用も増える、企業も増える。そして繁栄するということです。

成田はもっと成長する中心になると考えています。物流、倉庫、空運、それ以外に製造業がこの地域周辺に拠点をつくります。成田空港は国際的に知られています。そして、そこから多くのことが生まれてきます。人々が惹きつけられる。ですから、千葉の若者だけではなく、日本中の若者が成田空港の周りに集まってくる。そこにチャンスがあると考えます。

この地域には、世界標準の医療があります。医療モデルがつくり変えられます。日本は高齢化が進んでいます。世界標準の病院をもつ、またそれと同時に、ITが医療にも革新的な形で導入される。そうすることによって、この地域がグローバルなリーダーになりえます。テクノロジーを高齢化に適応したり、医療のモニターに応用したりして、新たな雇用も生まれる。そして新しい企業も生まれてきます。そして、起業家精神が爆発的に増加をして、ますます若い人たちが千葉に留まるようになり、千葉に戻ってくるようになります。

そして、人々が利益をあげるようになります。そうすると、県、地方自治体、そしてこの会場にいらっしゃる多くの方々が、この地域に多くの投資をするようになる。そうすることによって、この地域がより強く、魅力的になるわけです。その結果、さらなる雇用や企業が生まれ、そして多くの若者たちが千葉県に留まるということになります。

そのような将来をみなさん想像することができるでしょうか？ 私はできます。なぜかといいますと、私は世界中のいろんな地域で、このようなことが起きているのを見てきたからです。特にアメリカです。新しい方法でみなさんが協働すれば、その地域を新たな軌道にのせることができ、成功させることができます。千葉でも、これまで経験してきたことのないような成功を経験できるようになると思っています。

それでは、これがどういう形で実現するか話していきます。戦略アプローチについて考えてみたいと思います。アメリカのみならず世界的に、多くの地域において成功しています。これは、非常に簡単な概念で、「セクター・パートナーシップ（以下、産業界での協働）」というものです。産業界での協働が非常に重要で、企業がリードをし、地域のパートナーが企業と連携するものです。

彼らが何をやっているのか、これと同じことをどう構築するかということもお話したいと思います。そして、このようなビジョンを達成するためには、この会場にいるみなさんがどのように連携して、協働していくかということについてお話したいと思います。

今日、私たちが一緒にできること

みなさんに3つのことを考えていただきたいと思います。私のプレゼンテーションの際に考えていただきたいのですが、いろんな話題を話した時に、みなさんは、よい質問を考えてみてください。つまり、私がここにいるという時間をみなさんに活用していただきたいのです。

そしてもう一つ、みなさんから一つよいアイデアを聞きたいと思います。どうすれば、よりよい千葉を構築することができるのかです。

そして、3番目にみなさんが私からよいアイデアを聞いたかどうか教えてもらいたいと思います。もしかしたら、千葉で使えるかもしれないというアイデアがあったら教えてください。いろんなアイデアを伝えたいと思います。ためになるものもあると思います。

ぜひそういったものをみなさんから聞きたいと思っています。ぜひ私を助けてください。私の話が終ったときに、私の方から聞かせていただきます。手をあげてくださいとお願いします。もし誰も手をあげなかったら、こちらからあてます。

先に進む前にちょっとテストをしてみましょう。みなさんに手を挙げてもらえるかどうかのテストです。さて、今日の夕方6時に非常に重要な試合があります。日本対オーストラリアの間の試合です。もし日本が勝つと思う方、手を挙げてください。日本対オーストラリアの試合、簡単ですね。はい、みなさん満場一致で手を挙げてくれましたね。質問したときに、今の様に手を挙げてください。



産業界に焦点を当てる

では、プレゼンテーションに入ります。まず、なぜ？ということです。

産業界での協働ですが、なぜ産業界に焦点を当てるのでしょうか。いろんな企業があると思います。この産業界から一つの企業、こちらからまた別の企業という形ではなくて、その産業界自体に焦点をあてるのはなぜでしょうか。それは、成長力、競争力のある産業

が成長し、そして繁栄する地域経済をつくれるからです。二十年前のものは、今の先端技術の産業とは違うかもしれませんが、多かれ少なかれ、どのような産業界においても企業には共通のニーズがあります。つまり、喜んで協働したいという思いがあります。産業界全体、そして地域の改善のために、ある一定の条件がそろえば一緒に協働したいという思いがあるわけです。

さて、強い産業があるとします。そしてそのことによって、強い地域経済がもたらされると、今度は雇用が創出され、そして強い地域がつくられてきます。つまり、若者が留まりたいと思う理由が、ここで生まれるわけです。これは、私が成功のための活気あるサイクルと呼んでいるものです。

強い産業があれば、非常に強固な地域がある。ところが強い産業がないと、これが逆方向のサイクル、つまり、ネガティブに働いてしまいます。つまり、強い産業がなければ、地域も破綻し、政府や自治体からさまざまな補助金、助成金をもらうようなことになる。それはやりたくないと思います。ですから、なんとかして、産業が強くなり、そこで協働し、地域とも一緒に協働して、さらに地域を高めていくという方向にもっていかなければなりません。

産業界による協働とは何か

それでは、この産業界による協働とは何かということを考えてみましょう。産業界による協働というのは、地域の市場のレベルに存在します。これは、ある都市の2つぐらいの企業ではありません。さまざまな自治体にまたがった複数の企業です。そういう形で世界は動いています。世界を見てみると、市や町があり、州があり、国があり、そして地域の中にはたとえば、サプライヤーやさまざまな企業があります。

私の言葉ではなく、みなさんの言葉をつかって、産業界による協働というものをきちんと定義づけなければいけません。アメリカにおいても自分たちの言葉をつかうことによって、意味のある産業界による協働ができあがるからです。つまり、一つの産業、産業クラスターの中にある複数の企業が、政府、教育機関、経済団体、労働団体、地域組織、いろいろな組織と連携して、その産業界が必要とする労働力や競争力のために貢献するということです。

非常に分かりやすい考え方ではないかと思います。時に、国あるいは自治体、この場合ですと千葉県から支援を受けることもありますし、そうでない時もあります。

重要なことは、この産業界の中の複数の企業が協働して、この変革をもたらすということです。

産業界による協働の成功モデル

また別の見方をしてみましょう。これは成功例です。これが起こらなければならないという成功例ですが、同じ産業界から複数の企業を呼び起こすということです。つまり、事業

者のチャンピオンと呼んでいます。このような事業者は、産業界のことも、地域のことも両方に思いを馳せているということで、チャンピオンと呼んでいるのです。

企業の未来だけでなく、地域の未来のことも気かけ、そして懸念をいっている。そういった事業者です。千葉の若者を千葉に留めて、そして意味のある機会を与えたいと思っているわけです。

ではなぜ、こういうことが起こるのでしょうか。みなさんと同じように、この地域で生まれ育った人たちがいるわけです。ですから、ここがホームです。ここにルーツがあります。こういった事業者は、他の地方出身かもしれません。そして千葉に移住して、千葉の暮らしの質に、恋をしてしまった。すっかり千葉を気に入ったという人もいます。そして、この事業者は、自社の未来について理解しています。そして、その未来がこの地域の運命と絡み合っているということを分かっているわけです。つまり、地域全体が成功しなければ、自分たちの企業の成功もないということを分かっています。

長期にわたって、この地域で成長する。そのためには、この地域を捨てることはできないのです。だから、地域に関わりたいと思っているわけです。他の企業と協働したい。大学とも協働したい。そして、その他の地域の機関、そして自治体とも協働したいと思っているのです。

ここでの課題は、正しいやり方を見つけることです。みなさん忙しいです。製品を売らなければなりませんし、大変なわけです。その結果、企業をまとめて、協働させるということは、大変難しくなります。ですから、そのやり方を考えなければなりません。さて、お気づきになったと思いますが、それは、企業だけではありません。いろんなパートナーがいます。この図では企業が真ん中にあります。なぜならば、まず最初に企業に関与してもらい、協働の中心として、触媒として、そしてドライバーとしてとらえられなければ、うまくいかなくなります。協働を前に進めるためには、大学、自治体、その地域のさまざまな機関だけだと、その協働はうまく回らなくなってしまうからです。

企業が円卓に集まった場合、企業はその産業界として、優先順位がなんであるかということ、考えることができます。そうすると、そこでその地域は、信用することができることになります。重要なのは、地域の支援は、パートナーとならなければいけないということです。

ここでの大きな落とし穴は、企業が円卓に集まり、大学、自治体などの中で、彼らが、顧客のような扱いを受けるということです。企業は、新たなニーズはなんなのか、そして、そのようなニーズに対して、どのように答えることができるのかと聞きたがるわけです。しかし、よりよいのは、そこで、みんなで議論することです。どうすればこの産業をより強固にできるか、そして自らが何をしなければいけないのか、お互いに何をして、どうやって実現すればいいのかということ、考えるようにしなければなりません。つまり、この地域とその産業界がパートナーとして連携するということであり、顧客であるとか、そのベンダーであるというような関係ではないということにする必要があります。これは非常に大きな違いです。成功している協働では、このことが非常に大切です。これはアメリカのみならず、世界的にいえることです。

連携によって得られるもの

先ほどもいいましたが、このような協働が達成するものは多くあります。たとえば、人材の改善です。地域と協働することによって、よりよい人材を産業界のためにつくるができます。またインフラも改善できます。またブロードバンドインターネット、新しい高速道路、新しい公共交通機関が、このような協働によって加速化できます。イノベーションも生まれる。また、規制、輸出促進、マーケティング、さまざまな優先課題が改善されます。

アメリカや国際的な協働では、さまざまな優先課題をみて、それぞれの産業を強化しようとしています。それと同時に地域も強化されています。

北コロラドでの産業界による協働の事例

それでは、いくつかの事例を見ていきます。実践では、どのような形かを、紹介していきます。私が話すことは、実践は難しいのではないかなと思うかもしれません。4年間でこれが達成できるのか。答えはYESです。過去40年間で見てきたいくつかの協働によって、大きな影響があった事例を紹介していきます。

最初の協働ですが、先端的な製造業による協働です。これは、アメリカのコロラド州の事例です。4年ほど前、いくつかの製造企業がこの地域にあって、それぞれの企業は成長していました。かなり実績もよかった。しかし、必要な人材がいなかったし、思ったほど早く成長できませんでした。その原因が何かということを知ろうとしました。

ここで重要なのは、このような製造企業は2つの領域に分けられていたということです。アメリカでは郡に分かれています。それぞれの郡は、その郡の製造業者を別の郡の製造業者とは話し合いをさせませんでした。なので、うまく機能できませんでした。それで、製造業者として、互いに郡の境界を超えて話し合おうとしたわけです。一緒に連携ができるのではないかと考えました。それによって違いが生まれました。最初は、25社くらいで始めたのですが、現在では150社くらいが関わり、協働して、さまざまな優先課題に対応しています。

それでは、どのようなことを達成できたのでしょうか。まず、最初にやったことです。これまでこの地域の多くの製造業者がさまざまな領域に分かれていました。それぞれパートナーを持っていました。商品を買ってもらうパートナーもいました。ですが、その地域外のサプライヤーから買うよりも、地元のサプライヤーから買うことができるということが分かったわけです。今まではお互いを知らなかっただけなのです。

時には、同じ地域で企業同士が互いをよく知っているのではと思う傾向があります。実はそうではない場合が多くあります。しかし、彼らは、円卓に集まり、そこでお互いを知り合いました。そして、彼らは、地元のサプライヤーを見つけることができ、商品を互いに買

い合うことができるということが分かったわけです。4年間で、彼らは連携し、互いに購入し合い、それによって新たな売り上げが生まれ、新たな雇用も生まれました。1つの協働からそれだけの成果が出たわけです。

企業を集め、そこに産業界があるならば、彼らが協働することによって、ビジネスパートナーとして、チャンスを見つけることができるわけです。目の前で、そういったことが分かってくる。本当に価値を生みだしていくわけです。



しかし、これだけでは留まりませんでした。彼らも、若者が地域から流出しているということを懸念していました。この事例は、コロラド州のデンバーに近いところのものです。デンバーというのはアメリカでは大きな町です。千葉の若者が東京に行きたいのと同じように、ここの若者も同じような気持ちを持っていました。そして、いったん流出すると戻って来ませんでした。なぜかという、彼らは、地元にはチャンスがないと考えていたからです。しかし、現実には、かなりよい雇用があったのです。製造業においては、非常によいチャンスが存在していたわけです。しかしながら、若者たちはそれを知らなかっただけなのです。

それで、製造業者としては、この状況を変えようと思いました。そこで、彼らは、会社のツアーを提供したり、授業で自らの仕事の内容を話したり、メーカーのフェアのようなものを行いました。そこでは、実際に物をつくるチャンスを与えて、あたかも製造業者のような経験をさせました。しかも、数回だけではなくて、包括的なプログラムをつくり、複数回、この方法でやってきました。最初は、20名ぐらいの学生からスタートで、非常にレベルの低い活動でしたが、今では毎年1000人ぐらいの学生を製造プラントに連れて行って、先端的な製造業がどういうものかを教えるようになりました。こういった学生たちが、キャリアに関する判断をし始め、製造業に行こうと思い始めるようになりました。たった4年間の間にです。実際にこのような業界で働くことによって、本当に素晴らしいチャンスが生まれるんだということを知り、変わっていったわけです。

この成功のカギは、企業がこのプロジェクトの受け入れ役を担ったことです。もちろん地元の大学、地元の自治体のサポート、コロラド州からの補助金などもあって、このような事業の拡大が起きましたが、彼らこそが最初のアイデアを出して、このプロジェクトをけん引していきました。

最後に企業が考えたことは、新たな従業員に必要なのは何なのかということです。大学が考える前に考えたわけです。どういう技術スキルや能力を学生が持つべきかということを考えました。そして、そこで終わりではありません。彼らは大学や地元の短大とも連携し、カリキュラムの設計を支援したり、実際に教室にいき、カリキュラムの補助的なものとして、業界からのプレゼンや、実際の現場の製造工場での問題を持ち込んでのケーススタディ

などをして、学生に問題解決までさせるようになっていきます。

このようなことで、大学と企業との関係は全く変わっていききました。そして、より透明性の高いシステムになり、教員の方が、実際の企業の実践者と協力をして、学生が参入した場合、本当に何が必要なのかということを考えるようになったわけです。これらによって、双方がメリットを享受できるようになりました。

ハンブルド・メイド

もう一つ事例を紹介します。こちらは、おそらく千葉県での取り組みにより近い例ではないかと思います。千葉県ではさまざまな農作物を栽培しているからです。こちらにも挑戦課題をかかえていたものです。カリフォルニア州北部のハンブルドというところ。非常に大きな問題がありました。親が子どもたちに、もうここでは、仕事や機会がないから、ここをでていかなきゃだめだよ、というほどかなりひどい状況でした。ですが、実は、この農業にはいくつかの機会があったのです。

10年前の話ですが、非常に成功した個々の農産物はありました。企業のオーナーは自分たちの製品を個々に販売していました。ビーフ、マイクロブリューワリーのビール、ワイン、チーズ、いくつもの非常に素晴らしい農産物・商品はあったわけです。しかし、あまりにも狭い範囲で、しかも個々に、あるいは一つの町だけで、それらの製品を販売していたので、大きな違いは生み出せなかったのです。

ところが、ある時に、お互い企業の人たちが話し合いを始め、もっとよいやり方があるはずだ、もし一緒に協働したらどうなるだろうかということになりました。

そして、それぞれの製品をひとまとめにして、一つのブランド「ハンブルド・メイド」という名前のブランディングをしたのです。さらに、ハンブルド・メイド・ドットコムというサイトをつくりました。そのホームページでは、さまざまな商品が紹介されて、買うことができます。これは、この地域のブランディングをただけです。ハンブルドと名前を聞けば、何が手に入るかということが、みんなが分かるようになっているわけです。

千葉も同じだと思います。千葉ブランドとして、この地域の特殊なものがあるでしょう。それらを広範にブランディングすることによって、全ての商品は、もっと売りやすくなります。その結果、仕事が新たに生みだされます。そして若者にとっては、この業界に入って、また別の商品をつくろうというような気持ちにもなります。そして、メンターとなって、年をとってもこうした商品を開発する仕事に従事できます。そして、この地域に留まることができるので、みんな幸せになるわけです。若者が定着し、より多くの仕事ができるということです。これは、千葉のみなさんもできることです。みなさんから、大学あるいはそれ以外の地域のパートナーに働きかけて、協働することができるわけです。

ゴールは何か？

では、今までと、何が違うのでしょうか。今、産業界のリーダーシップの話をしました。こ

の産業界のリーダーがアジェンダを策定し、そして、優先順位をつけて、行動するための戦略をつくります。そして、協働を形づくりします。そして企業間で一緒に仕事をします。複数の企業が互いに話し合いをして、共有の優先順位をきちんと確認するということがまず大切です。その後、コミットして、自分たちの優先課題に取り組むわけです。

もし、一緒に仕事をするのができなくて、たとえば大学だけ、政府だけでやるのであれば、それはうまくいきません。みなさんとしては、企業が何を必要とするのかということを考えなければいけません。そして大学として、地域として、どう支援できるかということを考える。これが非常に大きな違いになるわけです。その結果として、よりよい結果を生むことになります。

企業にとってのベネフィット

では、みなさんがもし企業人だとしたらどういったメリットがあるのでしょうか。メリットとして、人材、マーケティング、ブランディング、そういったものを手にすることができます。以前はなかったかもしれません。協働によって、その成長機会を評価して、行動をおこすことができるかもしれません。あるいは、大学や政府と一緒に仕事をするプロジェクトが生まれるかもしれません。大学に対して支援してくださいといえる機会ができるかもしれません。そして、互いに何かを教え合う機会ができるわけです。

大学にとってのベネフィット

大学関係者、教育関係者だったら何が得られるでしょうか。みなさんは、この業界のニーズが変わってきている、その変革について非常に焦点を当てた形で理解することができます。大学運営をしている中で、産業界が何を必要とし、何をニーズとしてもっているかについてクリアなメッセージを得ることは簡単でしょうか？ 今は、一つ一つの企業を訪ねて理解しなければいけないでしょう。ですが、こういった産業界による協働があれば、一つの道具として、その業界の声を吸いあげることができるわけです。大学の中にはさまざまな人材がいます。そのニーズに対し、カリキュラムで対応していくことができるようになります。

それによって、市場自体を変えていくことができるわけです。素晴らしいでしょうか。産業界による協働があれば、直接呼びかけて、そして仕事をすることができます。サンプルの勉強だけではなく、直接働きかけることができます。これは非常に有効なやり方で、学生にとってキャリア形成の機会になります。業界から連携を得られるわけです。そして業界が求めるような形で、学生を教育し、トレーニングすることができるわけです。そして、千葉の産業界に送り出すことができるようになります。

“千葉チャンピオン”を探し出す

さて、最後になりますが、私が一番伝えたい重要な点です。

それは「何を見るか」「探すか」ということです。みなさんの中には、すでに探し出している方がいると思います。業界の方にも、何人かお会いしました。ぜひ「千葉チャンピオン」を探してほしいのです。

チャンピオンとは、とても重要な方たちで、次のような特徴をもった方です。地域経済の中のさまざまな産業界にいて、その産業界のリーダー、会社の社長、あるいは経営者であるかもしれません。このような方たちは、自分たちの業界の将来に向けて力強さを感じているのです。たとえば農業であれば、地場の産品に関して、非常に力強い思い、特別な思いをもっているわけです。あるいは製造業、輸送関係、物流関係、医療関係の中にもいるかもしれません。あるいはITの企業かもしれません。いずれにしても千葉の中で、それぞれの産業界が非常に大きな影響を与えることについて強い意志をもっています。そして、千葉県の将来や明日について強気であるということです。たとえば、COC+とどのように連携できるかということについての明確な考えがあります。ここに集まっている方もそうだと思います。チャンピオンとは、こういう定義です。

そして、みなさんにはチャレンジをしてほしいと思います。ここに集まっている方、一人一人が千葉チャンピオンをそれぞれの産業から見つけて、集めてきて、連携を築いてください。そして、責任をもたせて、千葉県の成長する産業において、優先順位をきちんと明確にし、それにもとづいてコミットをしてもらう。そして、一緒に仕事をしていただきたいのです。大学、自治体、地域のさまざまな組織、全員が集まって、優先順位をぜひつくってほしいと思います。

もし、それが複数の産業界で体系的にできれば、今後、4年以内にみなさんは、千葉の方向を変えることができると考えています。コロラドでもハンブルドでも、それをみることができました。オーストラリアでもフランスでもアメリカ中でそれを見ることができました。なので、このことは、アメリカ的なものではないし、ヨーロッパ的なものでもなく、文化的な制約があるものではないと思っています。これは、人間の本性に関わるものだと思います。

人間というものは、自分の地域のために働きたいと考えています。そして、地域に価値があるものだと考えています。私たちのミッションは、人々が正しい組み合わせによって、地域のために働くということです。企業の人たちをそのチームからはずしてはいけません。企業の人たちにぜひ、大きな形で関わってもらってください。

みなさんはもう始めていますが、やり方を間違えていけません。昨日、視察をしたときに、このプロセスはもう始まっていると分かりました。なので、ぜひこのプロセスを続けていただきたいと思います。そして、次の高みに上げてほしいのです。このような産業界に焦点をあて、企業の人たちを真剣に関与させてほしいと思います。みなさんと彼らによって、よりよい千葉をつくることができると 생각합니다。4年間で、実際に変化をもたらし始めることができ、方向性も変えることができると考えています。

これが私の伝えたいことです。

SECTOR PARTNERSHIPS

Working Better Together

COECON
collaborative economics

THE WOOLSEY GROUP

My Role in Our Collaboration Today

Why Sector Partnerships?

What Do They Do?

How Do We Build Them in Chiba?

Your Role in Our Collaboration Today

One Good Question to Ask

One Good Idea From You

One Good Idea You Heard From Me

Why Focus on Industry Sectors?

Growing and
Competitive
Industry
Sectors

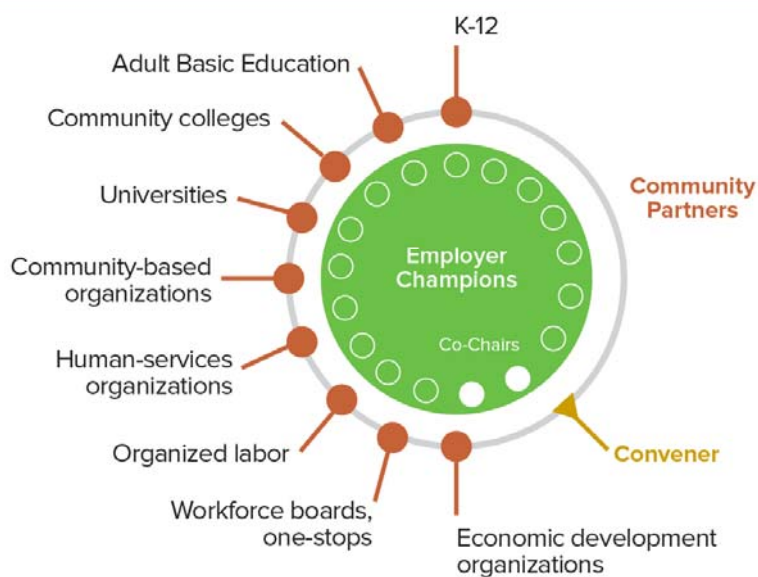
Growing and
Prosperous
Regional
Economy

Job Creation
and Strong
Communities

WHAT ARE SECTOR PARTNERSHIPS?

At the regional labor market level, a **partnership** of employers within one industry sector or cluster that work closely with **government, education and training, economic development, labor and community organizations** to focus on the workforce and other competitiveness needs of their industry. These **regional partnerships** may or may not have support from the state and/or federal level.

EMPLOYER-DRIVEN, COMMUNITY-SUPPORTED SECTOR PARTNERSHIPS



WHAT DO THEY ACCOMPLISH?

- Talent
- Infrastructure
- Innovation
- Regulatory Process
- Export Promotion
- Marketing
- Other Shared Priorities to Grow and Support Sectors

NORTHERN COLORADO MANUFACTURING PARTNERSHIP

More than 50 northern Colorado manufacturing companies and 20 public partners established the Manufacturing Partnership in 2013 to address common issues in the industry

Mission statement: “Partners working passionately to ensure Northern Colorado Manufacturers and our Communities thrive.”



PRIORITIES INCLUDE:

Networking and local supply chain issues

Changing the perception of the industry and encouraging youth to pursue manufacturing

Developing vocational/technical skills as a career pathway for youth and adults in transition

NORTHERN COLORADO MANUFACTURING PARTNERSHIP

Results thus far:

Identification of local suppliers, increased business among local companies

Campaign to local high school students, promoting manufacturing careers, company tours, hands-on events

Detailed profiles of regional high-demand occupations based on industry-wide consensus via "skills panels"

Plans by industry to expand internships/other workplace learning opportunities, assist local institutions on curriculum/delivery/equipment/etc.

New community college, university, and high school programs in process in response to industry demand



HUMBOLDT MADE



Results thus far:

Training to expand pool of food processing supervisors, helping businesses expand and opening up back-fill opportunities

Comprehensive branding, bundling, and export strategy, growing customer base, increasing jobs, and raising wages

Coordination of local shipments, filling trucks and creating cost savings

Strong business influence to successfully improve broadband and approve \$100m bypass for improved shipping flow

Restructuring of local community college curriculum, reorientation of local WIB funding priorities



INDUSTRY: WHAT'S THE GOAL?

Industry Leadership in developing the agenda, the priorities and the strategies for action.

Industry Partnership demonstrated in a willingness to collaborate together (company-to-company), and with support partners.

Industry Commitment in implementing action areas, including time, in-kind and financial commitments as required to realize goals.

The “What’s in it for me” of Sector Partnerships: FOR COMPANIES

A place to solve major shared issues, including talent shortages

A place to jointly assess and act on opportunities for growth

A single table at which to work with public entities

An opportunity to share costs related to needed solutions

The “What’s in it for me” of Sector Partnerships: **FOR EDUCATORS**

A venue for faster understanding of changing industry needs

A vehicle to identify, build and refine curriculum, programs and credentials

The most effective way to truly create industry-driven career pathway “systems”

The Importance of “Chiba Champions”

Leaders of their Business

Feel Strongly About Future of Their Industry

Feel Strongly About Future of Chiba

Your Role in Our Collaboration Today

One Good Question to Ask

One Good Idea From You

One Good Idea You Heard From Me

SECTOR PARTNERSHIPS

Working Better Together

COECON
collaborative economics

THE WOOLSEY GROUP

質疑 応答

それでは、ここから質疑応答に移りたいと思います。今日、聞いたことに関して質問してください。私はよいアイデアをシェアしたいと思います。みなさんが今までやってきた中で、効果的だなと思ったこと、千葉チャンピオンがいるかどうかなどを話していただければと思います。私が話したことの中で気に入った部分も話してほしいと思います。



質問:

パートナーシップのために、千葉チャンピオンを見つけるというところで、自分の企業の利益だけではなくて、地域の利益も含めて、発展性を考えている方、プレイヤーの方というのは、いろんな地域に多くいると思います。一方で、狭い地域だからその利権問題とか、同じ業界の他の人へ気を使わなければいけない関係性というのが、特に高齢の方にとってはあります。そのような問題が今まで関わられてきた中でなかったのか、そして、そういったものを打ち壊して、新しい関係をつくるためには、何がカギになるのかご意見をお願いします。

John Melville:

大変素晴らしい質問だと思います。本当に実践的な質問です。企業の方たちは自らの会社の収益性は、地域の成功と関連があると信じていると思います。そのような企業が、あまり密でない地域であったとしても、チャンピオンを見つけることができると思っています。地域を信じている人たちは、もしアプローチされたならば、彼らは他の企業、彼らに似たような企業をリクルートしてきます。だから、私たちの役割は、彼らが他の人たちをリクルートしてくるのを助けるということです。

私だったら、まず10人くらいからスタートします。そして、数が増えてきます。その業界の中で、クチコミで広がっていくと、多くの人たちが加わってくるようになります。なぜならば、このようなことをやっているチームに自分たちも加わりたいと思うからです。もちろん全部の企業が関わるわけではありません。それは心配する必要はないと思います。すべての企業をチームにいれようと心配すると、成功はできません。やる気のある人たちによる連携でいいと考えています。協働して何かを構築したい、そして千葉の未来をつくりたいという人が必要です。そういった人たちと一緒に時間を過ごせば、本当に実現していくわけです。興味のないような人たちを説得しようとしてもうまくいきません。

私だったら、見つけた人たちからスタートし、そこからさらに高めていきます。もちろん彼らにもリクルートしてもらいます。彼らの方が、自分たちと同じように千葉を考えている人たちのことを知っているわけです。今までは、たまたま集まることができただけです。地域の中で一緒にできなかったという人たちがいます。そういった人たちを誘ってもらうようにしてください。

質問:

最初は、小さなグループからスタートされたということでしたが、たとえば、職場見学ツアーを実施するにしても、バスを走らせるための資金であったり、協力をいただける企業へのオファーであったりのところは、どこかが事務局のようになっていたりして、多少の運営費を用意していかなければいけないものだと思います。最初から自治体や大学とかのコミュニティをある程度つくってから動き出すほうがベターなのか、それとも、まず、賛同していただいて、志を同じくする人たちで、資金を自分たちがだしあってでもスタートさせるほうがいいのか、どちらが効果的なのか教えていただけますでしょうか。

John Melville:

大変よい質問です。また、かなり実践的な質問ですね。

私の経験では、事務局のようなものとか、仲介の役割をする人は必要ありません。集まることを手助けする人は必要ないと思います。招待するとか、集まるように仕向けていく基本的なことは必要だと思いますが、自ら集まれば集まれるはずです。

なので、小さな資金は必要です。今の段階では、大きなものではありません。彼らを集めて、なんらかの仕事をしてもらい、優先課題を決めてもらう。次に、彼らの優先課題の中に、お金のかかるものも、お金のかからないものもあるでしょう。彼らにとって、本当に重要であることならば、みんなと協力して、自らの資金をだすでしょうし、自らの時間もそこに投入するでしょう。自治体や大学はそれをするための資金をもっています。COC+でも、なんらかの資金があると思います。しかしながら、協働があって、企業がコミットして、そこで時間とか、人材を投入してくれればいいと思います。

質問にバスの話ができました。コロラドの場合は小規模でスタートしました。最初の段階では、企業が負担をしていました。そんなに大きな金額ではありません。お互いお金を出し合って、1回目のバス代を出しました。1000人の学生になった場合には、もっとたくさんバスが必要になります。その場合には、州政府がバス代を補助しました。企業はコミットし、それを成功させようと思っていたわけです。だから、州政府は資金を追加することを正当化することができたわけです。企業は優先課題を決めて、できる限り多くのバス代を支払い、企業へ学生にきてもらうわけです。企業が門戸を開けて、学生を受け入れない限り、何台あったとしても、いくらお金を使ったとしても無駄になってしまうわけです。最初の段階に、資金を負担し、それによって連携ができてくるということです。

しかも、支払い続けているわけです。学生たちが来ている時間は仕事ができない。それでも支払い続けているわけですから、そういった意味では、事業者も協働に期待しているのです。州政府と企業との協働があって、多くのバスに学生を乗せて、体験をさせて、地域から出すのではなく、地域の中でキャリアを考える機会を与えることができるのです。そうした投資があれば、可能になります。最初に少し投資をして、チャンピオンと業界の人に集まってもらって、優先課題をきちんとつくることなしには、前に進めることはできません。何かと一緒にやらなければならない。そして、走り出したら、政府からも支援してもらうわけです。これを実行していかなければいけません。

質問:

最初の試みで、ある程度の効果が見込めるという形にもって行って、どんどん周りの人を巻き込んで行って、資金も協力をしてもらえるパートナーシップを築いていくということでもよろしいでしょうか。

John Melville:

その通りです。ある事業に最初に巻き込むためには、すぐにベネフィットがないといけないわけです。だんだん大きくなっていくにつれ、統計的な分析をして、選択をしていきます。学生がそういったものに触れるのを4年間続ければ、長期的なデータベースも構築できます。そうすると、学生たちが違う決定をすることができるようになります。たとえば、製造業に関係するようなキャリアでも、4年前とは全然違う選択をするようになるでしょう。それは、バスツアーだけによるものではなく、たぶん、他の要因もあると思います。だけど、地域で実行することによって、その違いを生むことができるわけです。

たとえば、千葉で考えた時に、データを測定して効果があることが分かれば、より多くの企業を巻き込むことができるようになります。そしてより多くの企業が、その成功アプローチに自分たちも関わりたいと思うわけです。それは、統計的な分析を行うことによって、こういったプログラムの結果、学生たちがより千葉の産業を選ぶようになったということがいえるようになれば、ということです。

質問:

私の理解が正しければ、産業界による協働には産業界や企業が中心になることが重要であると聞きました。しかし、COC+の事業は大学と自治体で構成された仕組みになっています。私はそれがすごく気になっていますが、それに対して何かコメントいただければと思います。

John Melville:

よい質問です。自発的に事業者が集まることはありますが、そうではないこともあるわけです。非常に忙しかったり、あるいは、協働することに価値を見い出せないということもあります。では、大学や自治体に何ができるか、COC+に何ができるかということになります。

COC+では、機会を創出してほしいのです。つまり、仲介者となって、事業者たちが集まりやすい環境をつくってほしいのです。それが重要な役割だと思います。

今まで私が話してきたことと、COC+がやっていることとは、決してずれていることではないと思います。COC+での最初のプロジェクトでは、非常によい基盤ができると思いますから、その基盤をつくった後で、次のステップにいくわけです。その中では、事業者や企業を巻き込まなければいけない。そのうちのいくつかが回りはじめたら、もっと増やしていくわけです。それは、産業ごとにです。そして、少し高まってきたら、私ならば、新しいやり方で、その産業界に関わり続けるということをやめたいと思います。次のステージとして私が推奨したいのは、産業界ごとに、リーダーの方たちに、優先課題を決めてもらって、走り出してもらうことです。そのように組み立ててほしいと思います。

時間になりました。みなさん本当にありがとうございました。学長はじめ、私をここに招待してくださった方、みなさんにお礼を申し上げたいと思います。

若者の雇用創出に向けた 取組みと大学の課題



- | | |
|-------------|-----------------------------------|
| [モデレーター] | 鈴木 雅之 千葉大学准教授 |
| [コメンテーター] | ジョン・メルヴィル Collaborative Economics |
| [パネリスト] | 藪内 正樹 敬愛大学教授 |
| | 鎌田 元弘 千葉工業大学副学長 |
| | 伊永 隆史 千葉科学大学教授 |
| | 野中 博史 聖徳大学短期大学部教授 |
| | 大枝 真一 木更津工業高等専門学校准教授 |

鈴木: 昨日、メルヴィルさんを、いすみ市と横芝光町にお連れして、現状を見て頂きました。もちろんゲストですので、よいところばかりを見せましたので、かなり進んでいると思われたかもしれません。

その前に、今年の3月にメルヴィルさんを訪ねて、サンフランシスコに行ってきました。千葉県でこういうことをやっているんですけども、成功の秘訣やどういふことが必要ですかって聞きました。そうしたら、まず星の数あるホームページから私を探したことがすごい。で、わざわざサンフランシスコまで会いにきたことが、すでに成功の一步を歩んでいる。というようなことをいわれまして、ああ、こういう風にいうんだ、と感動してしまいました。そこで、さまざまな成功の秘訣ですとか、ノウハウを教えていただきまして、こんなに一生懸命教えてくれるのであれば、是非日本に来ていただいて、ここにいる皆様にも共有をしてほしいということで、今日のシンポジウムの基調講演をしていただくことになった次第です。

後半のパネルディスカッションのタイトルは「若者の雇用創出に向けた各大学の取組みとその課題」ということですので、まずは、千葉のCOC+に参加している各大学の取組みを皆様と共有できればと思っています。それと、先ほど、メルヴィルさんから、せっかく日本に来ているので、私をとことん使ってほしいという言葉もいただいていますので、各大学の取組みや課題を教えていただきまして、それについてメルヴィルさんから、コメントあるいはアドバイスをいただくという組み立てで考えています。各大学の先生方にも、先ほどメルヴィルさんがよい質問をしてほしいといっていましたので、取組みの中での課題や障害などをぶつけていただければと思います。

最初に各大学の報告をいただきまして、後半には、メルヴィルさんに入っていていただき、ディスカッションを進めていきたいと考えています。それでは、よろしくお願いいたします。

千葉大学の COC+の取り組み

鈴木 雅之 千葉大学



千葉大学は、4つの市町村とまずは連携をしています。横芝光町、長柄町、いすみ市、勝浦市、そのうち横芝光町といすみ市、勝浦市には、ローカルハブという千葉大の拠点を役所の役場の中に置かせていただいています。この4つの市町で、6次産業化、インバウンド観光、メディカル連携という取り組みを開始したということです。

まず、千葉大学の教育的な特色の一つです。地域産業イノベーション学という副専攻を新たに作りました。これはいろんな専門をもった各学部の学生が、平行して、地域に関わる、あるいは地域で産業イノベーションする、地域振興することを学ぶという30単位の副専攻です。地域の基礎的なこと、千葉県の産業こと、イノベーションのことなどを学ぶ講義型の授業と、実際に地域に入って学ぶPBLや、インターンシップのような授業などの構成で、4年間で地域産業を新たに引き起こす、イノベーションする、あるいは自ら立ち上げてもいいという、人材を育成する教育を今年から始めています。

次に、各市町との連携についてです。まず、横芝光町では、観光まちづくりをテーマに地方創生を加速化する国の補助金を使って動かしています。地域内、地域外にさまざまな観光を進める団体がありますので、その人たちが観光まちづくり組織を立ち上げて、それを千葉大学が支援するというプログラムです。アドバイスをしたり、地域の方々が気づいていないような観光資源を見つける調査をしています。そこに学生や留学生をつれていって、ツアーをして実際にプロジェクトを考えてもらったりというようなことを始めています。横芝光町にいるさまざまな担い手やプレイヤーをまとめていくようなことが大学のようなところではないかということで、取り組みが始まっている段階です。

次にいすみ市ですが、いすみ市にも一人千葉大のスタッフを派遣しています。そこでも地方創生を進める国の補助金をいただきまして、食や自然を新たな事業とつなぐことを進めています。いすみ市には、さまざまな地域資源、農業、漁業の資源などのポテンシャルがありますので、千葉大学の研究力や教育力をいかしながら、ニーズ調査をすとか、園芸学部の先生の知見を生かして、新しい肥料をつくるようなお手伝いを始めているところです。先月には、フィンランドの留学生30名程度を連れていって、一緒にいすみ市の問題課題把握をしました。

長柄町では、高齢者が元気なうちに、長柄町にあるリソル生命の森という民間企業の住宅地に移り住んで、そこで健康寿命を延ばしていくという「生涯活躍のまち」づくりを進めています。

それを大学連携でやりましょうということで、長柄町とリソル生命の森から、それぞれ委託を受けています。そこで、大学ならではの生涯学習の機会を提供したり、予防医学センターの知見を活かして、介護予防のプログラムを提供します。今のところ 3 者との連携ですが、その他に介護事業所等に入っていて、新しい住宅地づくりを進めるということになっています。

勝浦市では、現在計画中ですが、空き施設等を活用したITベンチャーの企業誘致とか、観光まちづくりコンソーシアムなどをつくって、千葉大学で支援しながら進めていこうとしています。

最後に課題です。まだ始まって半年ですが、千葉大学が今現在で抱えていることとして、一番大きい課題が、やはり大学生が都心マインドを持っていますので、それをどうやって地域の方に向かわせるかということです。

それと新しく副専攻をつくりましたが、本当に4年間という短い期間で産業振興を担う人材を育成できるかどうか、もしできるのであれば、どういう方法がさらに必要で、できないのであれば何が新たに必要かということが、メルヴィルさんに問いかけたい質問です。

次に産業振興ですが、地域の中に入りますと、長い間、産業振興はもう無理だよと、このままやってもしょうがないし、できるはずがないと思っている人が多くいます。そういう人たちを、先ほどのコンソーシアムやパートナーシップに巻き込むときに、その気にさせる方法ってなんですかということを知りたいです。一方で、ある程度候補者がいたり、あるいは各プレイヤーとして優秀な人はいるんですけども、やはり、今自分の仕事にもものすごく一生懸命で、時間を割いても割いてもなかなか売り上げがあがらないかもしれない、そういう人たちを全体に引き込んで行くという方法が本当にあるんだろうか、ということを考えています。

地(知)の拠点大学による地方創生推進事業(COC+)

副専攻「地域産業イノベーション学」による人材育成と 横芝光町・いすみ市・長柄町・勝浦市の産業振興

千葉大学「都市と世界をつなぐ千葉地方圏の”しごと”づくり人材育成事業」

教育カリキュラムの改革

副専攻の新設による地方創生推進人材育成教育プログラム

千葉大学・敬愛大学・放送大学の関連科目の単位互換／読み替え

地域産業イノベーション学

千葉大学・敬愛大学・放送大学の科目で構成

輩出する人材像 地域産業をイノベーションするグローバル人材

地域産業イノベーション学 30 単位

普通教育科目

地域と暮らし(地域コア) (必修) | 講義・体験型科目 教養展開 | PBL・実習型科目 教養展開(地域コア関連)

地域づくり、地域産業、イノベーションの基礎・理論、スキル、体験を学ぶ

+

専門教育科目

所属学部・他学部で地域産業イノベーションに関する専門教育科目
すべての学生が履修できる全学共通科目があります

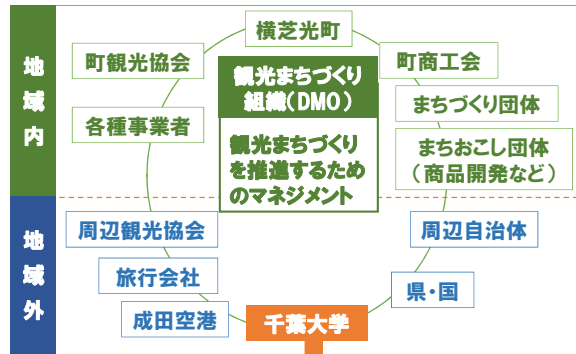
1年目	2年目	3年目	4年目
千葉の地域を知る(座学)	現地に短期的に入る(ワークショップ)	現地の団体・企業など職業体験する(インターン)	現地で地域活動开始的(チャレンジワーク)

グラデーション 定着学習

地(知)の拠点大学による地方創生推進事業(COC+) 千葉大学「都市と世界をつなぐ千葉地方圏の”しごと”づくり人材育成事業」 2

横芝光町との協働 ▶▶▶▶▶ 町じゅう集客装置の観光まちづくり 横芝光町地方創生加速化交付金との連携

現在は「観光のまち」ではない
美しい景観や美味しい食材など、潜在的なポテンシャルは高い。
成田空港から約20kmという地の利を活かし、地域の「観光力」
を、観光まちづくりを目指す。



観光・地域活性に係るアドバイス、観光資源の調査・提案、
学生・留学生との交流、観光・地方創生に係る講座の開講、地
域産品開発の支援



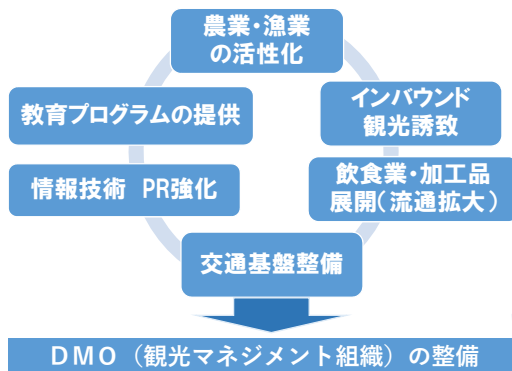
横芝光町ローカルハブ



体験・学習ツアー

いすみ市との協働 ▶▶▶▶▶ 食や自然を新たな需要と繋ぐDMO構築 いすみ市地方創生加速化交付金との連携

いすみ市の移住を促進させるための課題解決
将来的に新規雇用にも繋げられるビジネス創出



授業による課題把握

いすみ市ローカルハブ

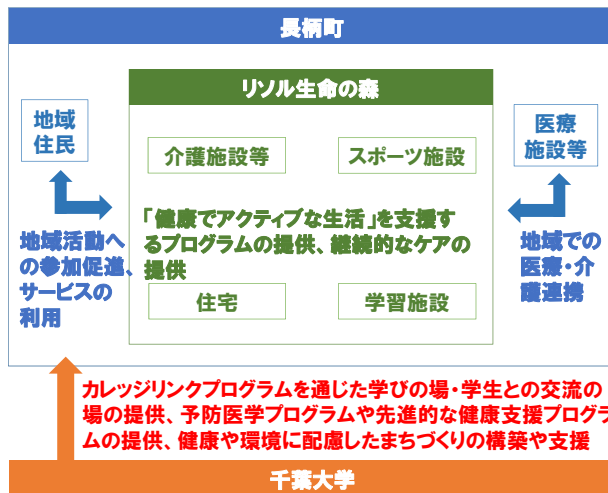


移住 & 創業に繋がるいすみ市の実態調査・現地視察、ニーズ調査(留学生も含む千葉大学の学生に実際に地域に入りこんでもらいながら支援)
新規創業素材調査として園芸学部とも連携し、漁業の際に網にかかる海草(現在は廃棄)の肥料効果測定

千葉大学

長柄町との協働 ▶▶▶▶▶ 大学連携(長柄町版)生涯活躍のまち 長柄町地方創生加速化交付金との連携

健康な高齢者が地方に移り住み、地域や多世代と交流しながら健康でアクティブな生活を送り、必要に応じて医療・介護を受けることができる地域づくり
長柄町、リソル生命の森、千葉大学の3者、関連する事業者が協働する



勝浦市との協働 (計画中) ▶▶▶▶▶ 「まち・ひと・しごと創生総合戦略」 による地域振興策

勝浦版総合戦略に基づき人口減少と地域経済縮小の克服、まち・ひと・しごとの創生などの課題解決を協働

空き施設等を活用したIT・ベンチャー企業等誘致事業

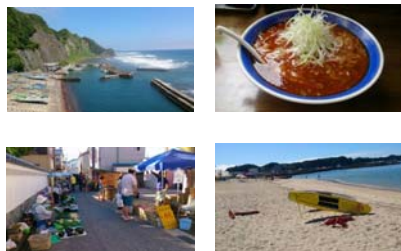
- * 廃校等を活用したサテライトオフィス、スポーツ施設等
- * 民宿等をリニューアル活用したインバウンド客の誘致

かつら観光まちづくりコンソーシアム整備事業

- * 観光協会法人化支援
- * マーケティング調査に基づいた着地型観光商品開発
- * 観光まちづくり拠点等の整備
- * 地域特性を生かした新たなオリジナル特産品等の開発

- ①未利用施設を活用した企業誘致に関して候補企業の紹介
- ②「勝浦市創業支援事業計画」策定への協力
- ③地域ブランド構築に向けて地域おこし団体・市内加工業者などへの訪問を通じてアドバイス等を行い解決を図る。

千葉大学



勝浦市ローカルハブ



産業振興・イノベーション人材教育にあたっての課題

大都市にマインドが向いた若者を、どうすれば地方マインド化できるのか？

大学4年間で、産業振興を担う人材を育成可能か？ どう地方に連続させるか？



地(知)の拠点大学による地方創生推進事業(COOP)

千葉大学「都市と世界をつなぐ千葉地方圏の”しごと”づくり人材育成事業」

7

地方での産業振興にあたっての課題

長い間、産業振興をあきらめてしまっていた人、あるいは無駄だと思っている人を、改めてその気にさせる方法は？

産業振興のコンソーシアムの協働パートナー候補や、各プレイヤーとして優秀な人はいるが、各人の事業活動に専念しがちなので、そういった人たちを産業全体および地域全体として連動させる方法は？



地(知)の拠点大学による地方創生推進事業(COOP)

千葉大学「都市と世界をつなぐ千葉地方圏の”しごと”づくり人材育成事業」

8

敬愛大学の COC+の取り組み

藪内 正樹 敬愛大学



今年、敬愛大学は創立50周年を迎えました。建学の精神が西郷隆盛の言葉、敬天愛人として、真理を敬い、他者を愛する心を育てる、ということを基本方針として、新たな時代に向けて、教育と地域社会の発展に貢献することを心がけています。

敬愛大学は、COC+参加大学として取り組んでいますのが、エアポートNARITA地域産業学ということを体系的に学ぶプログラム、成田の空港関連で働こうというプログラムを実施しています。空港関連の仕事として、色々な職業を想定して、キャビンアテンダントやグラウンドスタッフ、運航管理、航空物流とか様々な職業があります。こうした職業、仕事を想定して、そこで働く、空港関連の仕事をしていく、いい換えれば空港ゾーンに住み、空港関連の仕事をしていく人材を育成しようということに取り組んでいます。

そこで、課題だと考えている一つ目ですが、それは、今ある仕事に就職するということに加えて、いかに新産業、あるいは新たな就業機会を創出するか、です。そこに広げていくということが課題だと考えています。新産業、新たな就業機会の創出、これを考えたときに、その道筋として、まず千葉を知るということが大切なのではないかと考えています。そこで、敬愛大学は「千葉学」というものに取り組んでおりまして、千葉の歴史、文化、自然を知り、そして千葉の特性を活かした産業、企業を知る、ということ千葉学と考えまして、取り組んでいます。

敬愛大学総合地域研究所は、2010年から4年連続で、千葉学をテーマとしたシンポジウムを開催してきました。そして今、ご紹介したエアポートNARITA地域産業学の中で、科目として、地域企業経営論、千葉学特講、観光事業論という授業を設けています。ここには書いてないのですが、今年度、日本歴史遺産がいくつか指定されていますが、その中で北総4都市江戸紀行というネーミングで、佐倉、成田、佐原、銚子の4つの都市が、江戸時代、人々の行き交う、つながりがあったということで指定をされています。佐倉が武士の町、そして、成田が信仰の町、そして、佐原と銚子が物流、漁業、そして銚子では醸造が行われていたわけですが、江戸時代にはそうした人々の行き交う、江戸との関連ですが、文化、歴史、産業、物流などの流れがあった地域であるということで、これは新たな空港関連の観光資源、あるいはもっというと、歴史、文化と歴史的産業の観光資産であると考えられると思います。これからいろんな工夫が可能ではないかと考えています。

課題の2番目は、私たち教師は、この地域を十分に知っているか、ということです。次に、では、学生たちは十分に地域を知っているか、ということです。先ほど、3つの授業を設けたとご紹介しましたように、広く、深く、学生たちは十分に知っているか、つまり「千葉学」、千葉の歴史・文化・自然、そして千葉の特性を活かした産業・企業、これを十分に知っているかという課題に向かっては、更に充実をさせていく必要があると思っています。こういったことを知れば、千葉で就職をするということに、興味をもつようになるという風に考えています。そして生まれ育った地域を知るということの意味は、郷土愛を育むということになろうかと思ひますし、さらに、よその地域や世界を知るということが加わっていけば、日本の各地あるいは世界とつながっていくということを通じて、ローカルに目もち、同時にグローバルにつながりをもつグローバル、両方の要素を兼ね備えた人材が育つのではないかと思います。これが敬愛大学の今後の課題であろうと考えています。具体的には色々と考えるのですが、それはまだ大学としての取組みになっていない、これからいろんなアイディアの芽を育て、実現をしていこうというところです。



経済学部 | 経済学科 | 経営学科
国際学部 | 国際学科 | こども学科



建学の精神 **敬天愛人**

真理を敬い、他者を愛する心を育てる

敬愛大学は2016年に創立50周年を迎えます。
めまぐるしく変化する環境の中でも、
建学の精神「敬天愛人」を揺るがぬ基本とし、
新たな時代に向けて教育と地域社会の発展に
貢献してまいります。





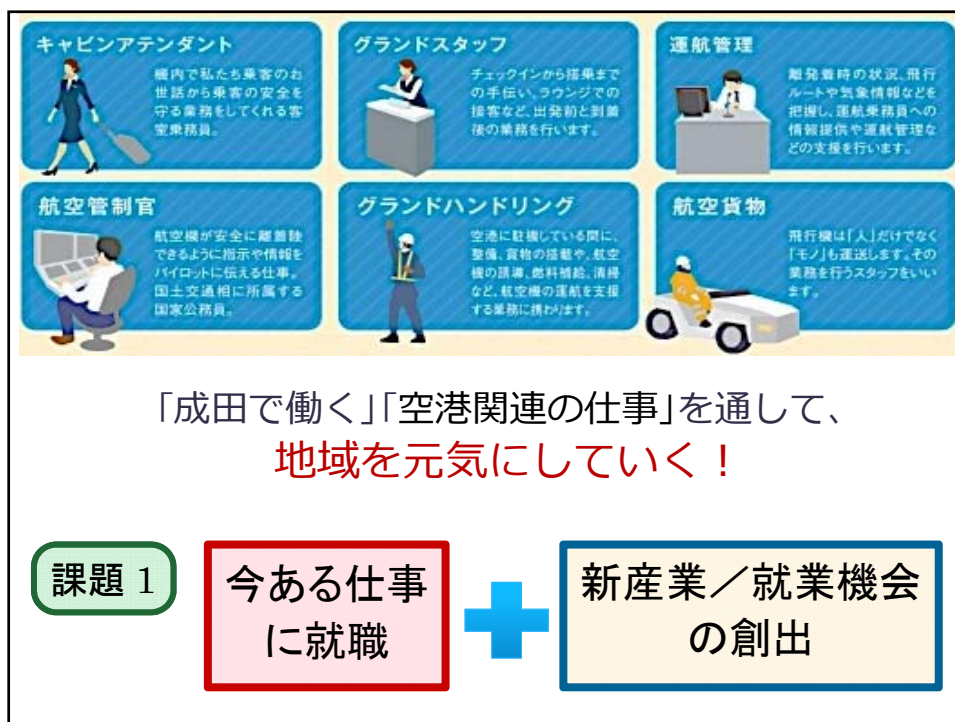
文部科学省
地(知)の拠点

敬愛大学は、千葉大学COC+の参加校です
サティフィケート・プログラム
「エアポートNARITA地域産業学」

 **敬愛大学**
www.u-keiai.ac.jp



NARITAで
空港関連で働こう



新産業／就業機会の創出のみちすじ ①

千葉を知る ⇒ 「千葉学」

- ①歴史、文化、自然
- ②千葉の特性を生かした産業・企業

＊ 敬愛大学総合地域研究所：2010年から4年連続
シンポジウム「新しい千葉学」を開催

＊ エアポートNARITA地域産業学の設置科目：
「地域企業経営論」「千葉学特講」「観光事業論」

課題 2

教師がみんな
「地域」を知っているか？

新産業/就業機会の創出のみちすじ ②

課題 3

学生たちは十分に「地域」を知っているか？

- ❖ 千葉の千葉の歴史・文化・自然
- ❖ 千葉の特性を生かした産業・企業
⇒ 知れば千葉での就職に興味を持つ

- ❖ 生まれ育った地域を知る
地域に根を持つ・郷土愛

ローカル

グローカル

- ❖ よその地域・世界を知る
⇒ 日本・世界とつながる

グローバル

千葉工業大学の COC+の取組み

鎌田 元弘 千葉工業大学



千葉工大はおかげさまで、昨年度後半から精力的に学生が入っておりまして、とてもとても短い時間では話しきれないのですが、できるだけ収まるように話したいと思います。

さて、千葉工大の取組みですけれども、まず、改組をやってしまいました。COC にあわせてというかつこいいんですけれども、ちょうど COC のタイミングでグローバル人材の育成と、地域で、地方で活躍する人材とって両方でやっていこうというところで改組をやりました。その中で、教育カリキュラムを見直しまして、ふるさとマインドを創るとか、地域の交流を創るとか、例えばボランティア科目であるとか、ソーシャルアクティブラーニングなどの授業を教養科目でつくりました。そういう中でまず地域に地域のことを良く知って、高学年は、それを課題解決に持っていこうというようなところですよ。

千葉工大のプログラムですが、まず学生に地域にでていってもらって、まず体感し、共感し、あるときは、怒って悲しんで、そしてそれをエネルギーにしていって、それを発信して、それを仕事として提案していく。さっき伺っていて仕事もまさに千葉のチャンピオンを探し出して提案をする、なんていうのは大変よいのかなと思いました。それを、Uターン、Iターン、Jターンにつなげていくというのが、千葉工大の方向です。

具体的に言うと南房総エリア全域ですけれども、特に、先ほど御宿のご紹介がありましたが、南房総の重要なカウンターパートとして、それと、千葉工大のある協定を結んでいる浦安市さんであるとか千葉市さんであるとか、習志野市さんであるとか、そういう都市部との対流交流をてこに進めていこうというような将来構造でいます。

まず南房総の取組みですが、先ほどいいましたように、まず低学年でボランティア、教養特別科目というのがあるのですが、そこから始まって、2年生くらいになると、ソーシャルアクティブラーニング、課題探求セミナー、ここは大きく教養課程を変えました。もう一つ、学生による社会実装で、ゼミナール系の科目で、PBL授業を展開していくわけです。それと南房総市さんの場合は、ひと・まち・しごとの総合戦略をすり合わせまして、こういった交通をつくってきました。

具体的にちょっと紹介したいと思います。体感・共感・共創・提案、これをしごとにつなげたいということですが、学生たちはまず施設に行き、施設で感じ、色々な人にお年寄りの話を聞き、悲しんで、怒って、というようなところで、動機をつくってきました。このチームはやはり介

護ってトイレが一番大変だ。で、トイレの中で、ちょっとした動作がお年寄りとのこう、会話を阻害するなんていうようなところに気づきまして、ちょこっと座れるいすというのを開発して、これで一つのベンチャーグランプリというのに応募しているのですが、こういうような、何て言うんですかね、地域で感じたことを形にするっていうことでつめています。

これはやはり、介護のチームですけれども、介護施設の中に、山が見えたり、海が見えたり、そうすると当然お年寄りは徘徊をしたくなっちゃう。徘徊するのだったら、徘徊してもいいじゃない。徘徊してもいいように見守りのドローンをセットして、徘徊ができるようなドローン、で、自由に徘徊ができるように、敷地内だけにとどまるかもしれませんが、これは学生の発想になります。

もう一つ、空き校舎、空き公共施設がたくさんあります。こういうようなところをまた利用して、ちょうど千葉工大の先輩が空き校舎を借りて、色々ベンチャー系のビジネスを立ち上げて、企業を誘致しよう、なんていうことをやっています。そういうようなときに、建築系の学生たちがここにきて、やっぱり感動するんですね、私たちもこうなりたい、建築の卒業した学生たちは自由に模型をつくらせて、そのアイデアを買ったり、人材を買ってくれる企業を探しましょう、それでベンチャーを起こしましょう、なんていうのが彼らの提案になります。

イノシシが大変なんですね、特に農作物、自分がつくった農作物を囲って、そこを耕さなきゃいけないなんてことにいらだちまして、しかもその前に、イノシシの肉をジビエ料理で食べました。で、猟師さんに銃で撃つってというのはどういうことなのか、命の大切さを知りました。そういうような怒りのなかで、彼らが考えたのは、イノシシにわなをしかけてそこに巻きつくデバイスを発明して、それでスマホと連動して、GPSに連動してスマホのスイッチを押すと、イノシシに電流が飛んで、驚いて、いのししさんはその畑にくるとイノシシは去っていく、殺さないでも、イノシシと共存できるというようなものです。こういうように南房総市さんは大変おもしろい取り組みで、これを千葉チャンピオンと探しながらやっていこうというような方向です。

御宿町ですが、去年からずっと町の皆さんと企画づくりをやっています。こんなかでチャンピオンは少し見えてきています。で、そういう中で、学生と地域の青年部の人たちと一緒に将来像を考えてやってきています。で、こういうように色々な、最初、素朴なアイデアだったのですが、2回目は模型をつくらせて、そしてまた色々ネットで情報のやりとりをしながら意見交換をして、ステップを少しずつステップが進むようなそんな企画に成長してきています。で、その中の成果の一つは、今年度はつい先だって、先ほど浦安とこの御宿のつながりをてこに、もしかしたら浦安に千葉チャンピオンがいるかもしれないと考えるわけです。で、そういうような人のために、浦安市民を主に対象にした交流・体験イベントを企画いたしました。あとは天文、学生のア文が、星空教室とかっていうようなことを企画して、こういうようなものをてこに、子どもを中心に交流を含めてやっていこうという企画です。もう一つ、御宿こども工務店というところで、子どもを対象に建設業を普及していこうというので、去年こんなことをやっていたのですね、それを空き校舎にプレイパークをつくらせよう、そこにこうしたベンチづくりであるとか、ストリートファニチャーにしてしまっ、それを交流の場をつくらせて、それ全体で御宿こども工務店っていうんですかね、土木建設業を増やしていこうというようなことを考えています。

最後に、御宿版CCRC、元気な高齢者を御宿に連れて行こうというプログラムですけれども、

上はアメリカ版ですが、御宿のこののびのびとした中で、御宿がそのままCCRCにコンパクトに農漁村において多世代で、ストック、プラス千葉工大の技術を使ってCCRCを組み立てていくとしています。これは、ちばぎん総研さんですが、実際に私も千葉銀さんであるとか、ちばぎん総研さんは、地域のチャンピオンだと思っています。そういうチャンピオンと一緒に作り上げて、これも地域に御宿台という別荘地があったり、農村があったり、漁村があったり、リゾートマンションがあったりしますが、それをつなぐ千葉工大の技術、そして学生というのがありうると考えています。

もう一つ拠点ですが、御宿に研修センターがあります。すぐ近くに廃校舎があります。千葉工大が全学生と全教員が iPad をもっています。学生が使い終わったのを御宿の小学校や、浦安の小学校に渡します。そういうところを拠点をつなぐのに、iPad があると思っています。あわせて、さっきの天体であるとか、プレイパークであるとか、千葉工大が夢を持って打ち上げるロケットであるとか、こういうものが千葉工大の子どもと学生が拠点をつなぐということにいくのではないかなと思っています。

千葉県COC+における 千葉工業大学の取組み



社会実装と地域資源・技術融合によるビジネス創成 【教育プログラムのフロー】

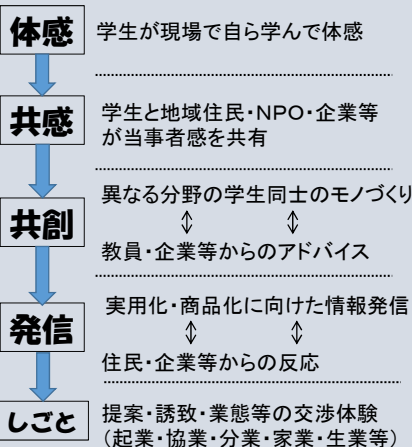
教育システム 地域との交流

カリキュラム
新学部・新学科
を起爆剤とした
継続的教育改革

ふるさとマインド
・地方出身者が多
い学生寮を活用
・団地シェアハウス
自治会活動

地域との交流
・学生が地域の
子供や元気な
高齢者をアシスト

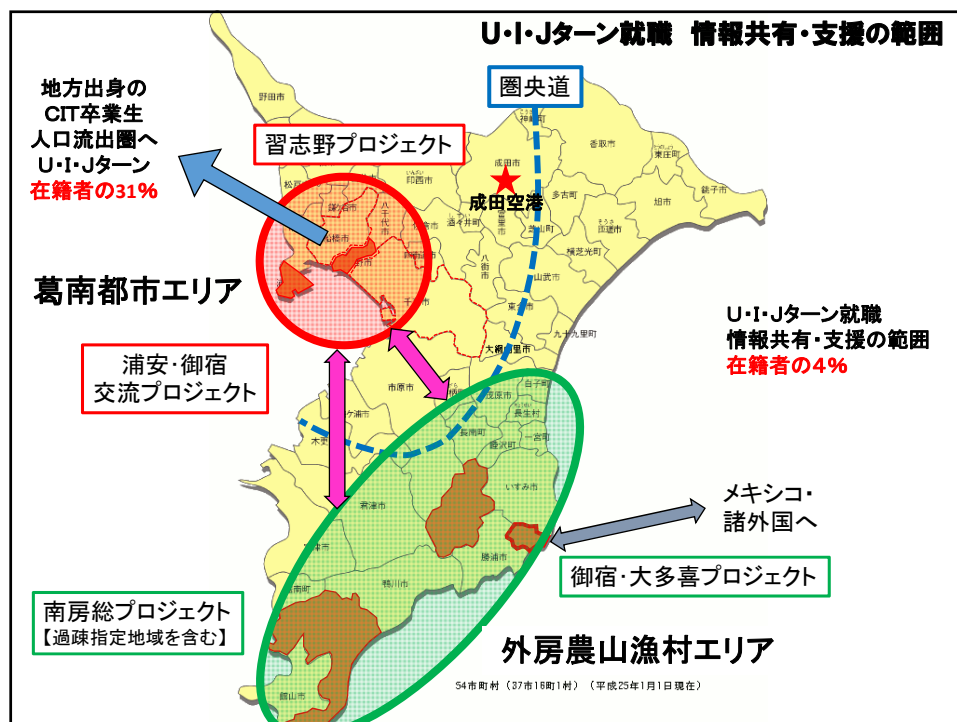
社会実装型PBL 地域資源・技術融合型PBL



若者の 就業支援

情報・若者動向の共有
産官学民金による企業

UIJの実現
就職



南房総市における取組み



構想 大学生の成熟度合いに応じたCOC+プログラム案

地域連携を通じた教育カリキュラム

学生による社会実装ゼミナール系科目等
 (展開科目等)
SILAB等の教育プログラム
 3・4年生・大学院生
 【特に意欲的な少人数の学生】

学生の興味を伸ばすソーシャルアクティビティ
 (教養特別科目)
課題探究セミナー
 (教養共通科目)
 3・4年生
 【興味を見つけた学生】

学生の興味を見つけるボランティア
 (教養特別科目)
 1・2年生
 【多くの一般学生・一部の大学に馴染めていない学生】

南房総市での地方創生プログラム案

基本目標1 子育て支援 基本目標2 仕事づくり 基本目標3 新しい人の流れづくり

地域ニーズに対する学生シーズを活かした地域課題解決

- ・科学技術を用いた若者の仕事づくりプロジェクト(基本目標1・2)
- ・重点プロジェクトに応じた小さな拠点づくり (基本目標1・2)
 [子育て支援・医療福祉・一次産業・観光業など]
 関連計画: 総合戦略(p13・14・15・16・21・22)

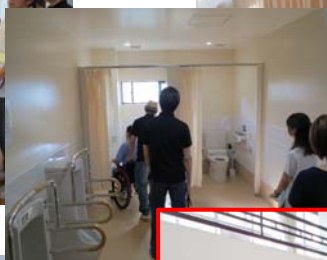
学生シーズを活かした若者のチャレンジ支援

- ・若者が活躍するための拠点づくり[FURUSATOサテライトキャンパス]
- ・地元の若者との交流・連携事業[仮称: 南房総地方創生塾]
 →若者のチャレンジを通じた地域の新たな体制構築
 関連計画: 総合戦略(p16・19・21・23)

大学生等の若者の活躍と異世代との交流の機会の創出

- ・市民団体等及び既存の小さな拠点での若者の活躍の機会の創出
- ・科学技術を用いた若者の視点からの南房総市のPR及び情報共有
 →学生ボランティアと科学技術を通じた地域ネットワーク強化
 関連計画: 総合戦略(p6・21・23)

体感→共感→共創→提案



キャンパスベンチャーグランプリに応募

ちょこっと座れる椅子 CHOICE !

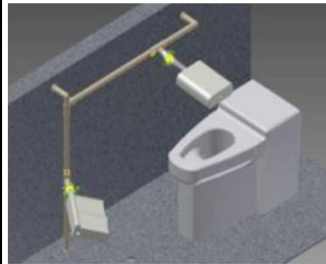
1



2



3



CHOICE を使うと・・・



介護者の作業に余裕

メリット

- ・ 立位による危険性が減る
- ・ 立位による残存機能を活かし、保持できる
- ・ 介護者の作業に余裕ができる
- ・ 立位のサポートがコミュニケーションになる



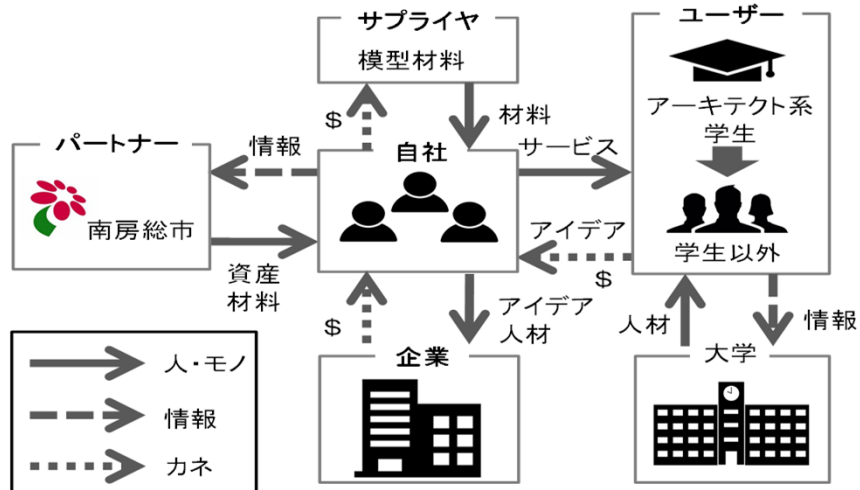
体感→共感→共創→提案

キャンパスベンチャーグランプリに応募
認知症高齢者の徘徊時におけるドローンを用いた危険回避



キャンパスベンチャーグランプリに応募

日本の建築学生にとっての試作のメッカになる！



アーキテクチャー系のものづくり拠点をつくり、それをサポートする事業



キャンパスベンチャーグランプリに応募 人間と動物の真の共生を遠隔制御により創り出す！



見守りが不要。殺処分を回避。人手不足の心配なし。

御宿町における取組み



①事前会議



当日。午前中から実際に自分たちの足で海岸側から山側まで散策。



住民の方々と一緒に話し合い。
(観光・CCRC・農業・漁業など)



発表に対し多くのコメントをいただき、さらなる課題を見出した。



松山市

- 歴史**
 - 徳島藩 調度
 - 百利路入子ノ切
- 文化**
 - 島根県立美術館
 - 島根県立博物館
 - 島根県立図書館
 - 島根県立美術館
 - 島根県立博物館
 - 島根県立図書館
- 自然**
 - 海
 - 島根県立美術館
 - 島根県立博物館
 - 島根県立図書館
 - 山
 - 島根県立美術館
 - 島根県立博物館
 - 島根県立図書館
- 趣味**
 - 釣り
 - 島根県立美術館
 - 島根県立博物館
 - 島根県立図書館
 - マリン
 - 島根県立美術館
 - 島根県立博物館
 - 島根県立図書館



地方出身の
IT産業生
人口流出率へ
IT・IT・IT
就職率の11%

葛南都市エリア
清安・御宿
交通プロジェクト

南房総プロジェクト
【島根県と連携を密に】

外房農山漁村エリア

IT・IT・IT就職 情報共有・支援の範囲

IT・IT・IT就職 情報共有・支援の範囲

IT・IT・IT就職 情報共有・支援の範囲

ON JUKU ~GO!!

千葉県 御宿町 体験イベント

2016年
10月8日(土)

海と山の恵ある御宿を
体験してみませんか

イベント当日、町内は
「おんじゅく伊勢えび祭り」の
期間中です。

第一弾 御宿こども工務店

御宿体験プログラム ~こども大工さんのつくるまち~

御宿町には、自然、文学、漁業・商業・産業、国際交流と多くの魅力がコンパクトな町に集約し、様々な体験をすることができる取石があります。そんな魅力あふれる町で、子供達に様々な体験をしてもらいたい、磯観察や、地引網、田植え体験など、多くの体験企画を実施してまいりました。

今回、「御宿こども工務店」~こども大工さんのつくるまち~では、職業体験を実施いたします。

大工さん、電気屋さん、タイル・左官屋さん、ミニユンボの試乗体験、等々、工務店さんのお仕事を体験しながら、当日は参加者全員で協力して実際に「ベンチ」をつくり、町の中に設置します。

また、千葉工業大学さんの協力により、設計図や図面、どうしたらできるのか？何故に？に答えるレクチャーも予定しております。

に見て、触れて、何故？の疑問に答え、体験するという、財産となります。

仕事の大切さや、協力・協働することの大切さを伝え、一歩一歩に近づけて考えていきますので、是非、この機会

28年10月23日(日) 8:00 ~ 12:00
御宿小学校 校庭 (雨天時 体育館)

募集人数：御宿町内の小学生 80名

お問合せ：御宿町商工会 電話 0470-68-2818 メール info@onjuku.or.jp
お申込み：申込みはメール・FAX・お電話で受け付けいたします。

は裏面の申し込み用紙をご利用ください。

主催：御宿町商工会青年部 共催：御宿町企画財政課 千葉工業大学

御宿版CCRC

アメリカ 大学連携型CCRCの事例

ニューハンプシャー州。
ケンダル・アット・ハノーバー
(ダートマス大学)



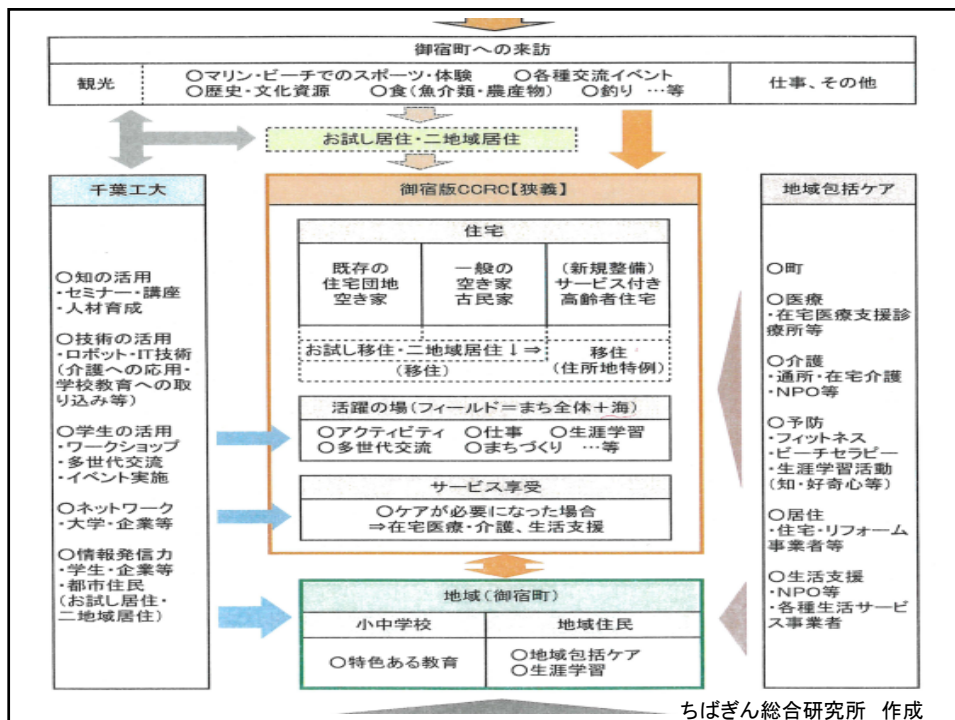
写真 三菱総合研究所CCRC関係資料より引用

- アメリカ版(民間ベース)
- ・敷地内完結＋高齢者中心＋新規開発

- 日本版(公共ベース)
- ・町まるごと＋多世代＋ストック活用



- 御宿版(そのまんまCCRC)
- ・コンパクトな農漁村＋多世代・交流・元気な高齢移住者＋ストック・先端技術活用



学生と科学技術が御宿をひとつにする！



千葉工大の拠点・子供と学生をつなぐ！



千葉工業大学のCOC＋取組みの課題

- 学内組織(教員・職員)に対して、地方創生・地域との連携の意義についてどうすれば理解を得られるか？
- 継続のための具体的な仕組みづくりは？
- 海外(特に新興国・開発途上国)展開の可能性は？

千葉科学大学の COC+の取り組み

伊永 隆史 千葉科学大学



千葉科学大学は、まだ非常に若い大学でして、日本初の危機管理学部を持っています。薬学部、看護学部というようにどちらかといいますと、国家試験をうけなければならないという学生が6割いるというような大学です。

さきほど、敬愛大学の方から成田をターゲットにしているというお話がありましたが、私どもの方では、エアラインのパイロットを養成するコースをもっていますので、敬愛大学さんとうまく今後何か協働できればいいなというようなことを先ほど感じました。

最初の若者の雇用という大変重い課題ですが、私どもが、パートナーとしていますのは銚子市です。それから東総地域にあります旭市、匝瑳市、香取市といったところも今回対象としています。その中小企業がどんなニーズをもっているかということを、私たちが包括連携協定を結んでいる銚子信用金庫、銚子商工信用組合の顧客リストからニーズをまず125件抽出することができました。ここにあるのは、ほんの一部ですが、このような感じで業種別にどんなニーズがあるかということが分かったわけです。

そのなかで、選ばれてきた6つの課題があります。今日は、この6つの課題の中から、一番上にある銚子の産品を活用した機能性食品の開発ということに的を絞りまして、ご報告したいと思います。銚子は、食料自給率258%という一次産業に非常に強い街です。この豊かな漁業や農業資源を健康というテーマで磨いて、命を救う食としては何が必要か、これは、災害にあったときの話です。あるいは高齢者が困窮したときということでもよろしいかと思います。危機を脱するための、危機管理のフードを開発するというような具体的な実践的なテーマを通じまして、人材教育や商品開発がどんどんなされると、その結果、女性の雇用が創造できるのではないかと考えています。

この銚子の産品ですが、中心になって動いていますのは、銚子市地域雇用創造協議会という組織で、中核は銚子電鉄からきた民間の方です。この方が命を救う食、危機管理フードについて提案をされました。千葉科学大学に内容説明があったのが、今年の1月です。この協議会から、学生に対して、危機管理フードとはどういうものか、こんなもんだというプレゼンテーションと一緒にやりませんかという勧誘が5月に行われました。その結果、学生が10名くらい手をあげまして、危機管理フード開発プロジェクトというのが5月19日にキックオフされました。その

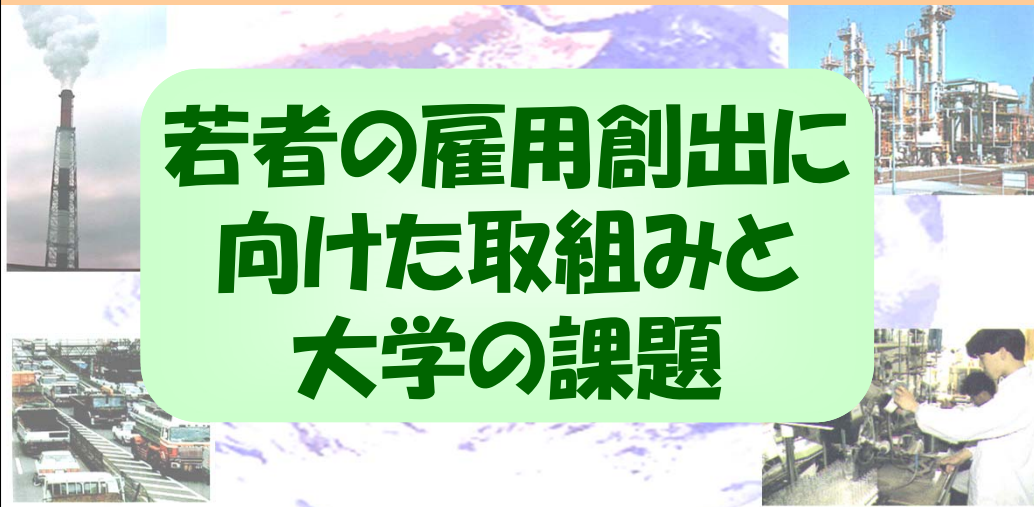
5月19日の会議をみますと、今なぜ危機管理フードなのかと、ここに学生がいますが、こういうことを学ぼうと、なぜそれは銚子で行うのかと、なぜ千葉科学大学の学生が関与するのかと、こういうところをしっかりとみました。こんなのがあったらいいと思うような防災缶詰のパッケージを考えようと、これは要するに、災害にあって、避難所にいるとき、毎日食べても飽きが来ないような缶詰が必要なんじゃないかというような考え方に基づいています。

毎月1回会議が開かれていまして、6月13日のプロジェクト会議では、売られている防災食を食べてみよう、あるいはその味とかパッケージデザインとか問題はないかというようなことを学生が評価しました。それで、災害時に役立つ情報や物は一体なんなのかということを書き出して、ブレインストーミングをやっていきます。7月4日の第3回のプロジェクト会議では、「なぜ」ということで、そのアイテムはどこがいいんだと、でそのアイテムが入ることによりどんな所で売れるのかと、要するに災害以外の所でも日常的に売れるものは考えられないかと。そのアイテムを入れるときに、どんな宣伝ができるかというようなことで、学生が集まりまして、様々、ブレインストーミングを通じて、手法を駆使しながら勉強していくと、こういうことをやっていきます。

8月もやっていまして、このときには災害食の現状を調べようということと、生活習慣病になってしまうような危機管理フードが必要じゃないかという、それからこれを応援するメッセージはどんなものを発信したらいいかと。9月は、自衛隊の習志野駐屯地にいきまして、自衛隊は災害食にどんなものを食べてるのかと、あるいは、自衛隊の隊員の方と意見交換をすることをやっていきます。10月3日には第5回目をやっていきます。

これらを通じまして、危機管理フード、どんなものをつくれればいいかと、これつくっているのは実は女性群でして、食べたり評価してるのは大学生が主にやっている部分があります。女性と大学生が主にこの中のメンバーとして、コアは企業の方、民間の方がいるのですが、実際に動くメンバーとしては女性とか大学生が会議にこのように、常に顔をだしているというわけです。女性群が開発して、今はスタッフの指導で女性群が調理したものを学生が食べてみるとかというようなことをしていまして、28年度中、ですから来年の3月までに商品開発をしようという目標が定まっています。

課題ですが、これらがうまくいけば、もう来年の4月からビジネスとして動き始めようとしていますが、女性は製造現場で雇用の創出につながるだろうと思います。しかしながら、このことで若者の雇用の創出が本当につながるのかと、つなげられるのかというところは、まだまだクリアしなければならない課題があると考えています。



若者の雇用創出に向けた取組みと大学の課題

[illegible]

千葉科学大学の若者雇用創出作戦（2）

役割 銚子市を中心に協働による産業振興、ローカル・イノベーションコンソーシアムへの研究シーズの提供

①銚子産品を活用した機能性食品の開発

食料自給率258%を誇る銚子の豊かな漁業・農業資源を「健康」というテーマのもとで磨き、**命を救う食、危機管理フードの開発**による実践的な人材教育や商品開発を通じて、主に女性の雇用を創造する。

②犬吠埼温泉の新価値創出

市の観光資源である「犬吠埼温泉」について、入浴だけではなく温泉成分を活かした化粧品等の商品開発を行い、観光業を活性化する。

③スポーツ合宿誘致を核としたスポーツタウン・ブランディング事業

野球、トライアスロン、マラソン大会などが数多い実態を鑑み、スポーツツーリズムを推進するNPO法人と連携、銚子西高校をスポーツ合宿施設としてリノベーションし地域の雇用を創出する。

④マッシュルーム栽培におけるハエ駆除の新技术開発

キノコの優良産地として高度な栽培技術を維持するため、差別化された簡便で低コストの菌類栽培の新技术を開発し、高度な担い手の育成及び定着を図る。

⑤好適環境水を利用する安全安心な海水魚陸上養殖の実証的研究

全漁連のシンガポールアンテナショップ等への高品質魚介類の輸出、地元水産加工業者による新しい輸出商品開発、千葉科学大学の技術支援（「好適環境水」等）を活用した商品化を目指す。

⑥自然（再生可能）エネルギー産業、特に大規模洋上風力発電の導入

銚子市の強み（自然環境、気候）のうち、特に海風を最大限活かした大規模洋上風力エネルギー産業の導入を促進する。

千葉科学大学の若者雇用創出作戦（3）

COC事業で始めたマッチング取組から、COC+へつながる若者・女性の雇用創出の芽が生まれ発展

【銚子産品を活用した機能性食品の開発】

(1) 銚子市地域雇用創造協議会から「命を救う食、危機管理フード」について提案



(2) 千葉科学大学に対する内容説明（H28.1.19）



(3) 同協議会が4回に分けて学生に対する「危機管理フード」プレゼンテーションと勧誘活動（H28.5.11-12）



(4) 「危機管理フード開発プロジェクト」kick-off（H28.5.19）

千葉科学大学の若者雇用創出作戦（４）

平成28年5月19日（木）

第1回 危機管理フード開発プロジェクト会議

【概要説明（銚子地域雇用創造協議会）】

- ・今なぜ、「危機管理フード」なのか？
- ・なぜ、銚子で行うのか？
- ・なぜ、千葉科学大学なのか？



【グループワーク】

「あったら良いと思う防災缶詰のパッケージ情報」について



千葉科学大学の若者雇用創出作戦（５）

平成28年6月13日（月）

第2回 危機管理フード開発プロジェクト会議

【グループワーク】

- ・防災食試食
試食した感想を「味」・「パッケージデザイン」・「課題」ごとに評価する
- ・災害時に役立つ情報・物
アルファ米+レトルトスープのパッケージにした際、同封する事ができる+α(情報・物)について



千葉科学大学の若者雇用創出作戦（6）

平成28年7月4日（月）

第3回 危機管理フード開発プロジェクト会議

【グループワーク】

・+αアイテムを絞り込む

①「なぜ」

なぜ、そのアイテムが良いのか

②「プレイス（流通）」

そのアイテムが入る事により、どんな所で売れるのか

③「プロモーション」

そのアイテムを入れる事により、
どんな宣伝ができるのか



千葉科学大学の若者雇用創出作戦（7）

平成28年8月8日（月）

第4回 危機管理フード開発プロジェクト会議

【情報提供（銚子地域雇用創造協議会）】

- ・災害食の現状について
- ・生活習慣病の危機管理フード開発 等

【グループワーク】

- ・応援メッセージ（キャラクター・メッセージ）



平成28年9月12日（月） 自衛隊習志野駐屯地見学、意見交換

平成28年10月3日（月） 第5回危機管理フード開発プロジェクト会議

【今後の予定】

危機管理フード開発に向けて会議を重ね、28年度中の商品開発を目指す。

【今後の課題】

女性の雇用創出につながるとしても、若者雇用創出にどうつなげられるのか。

聖徳大学短期大学部の COC+の取組み

野中 博史 聖徳大学短期大学部



「信頼と共感でつなぐ“ふるさと”づくり 松戸から南房総へ」と書いていますが、これは誰がつなぐのか、どのようにつなぐのかといいますと、私ども大学と市民と産業界とそして自治体、この4者が、信頼と共感でつないで、活性化あるふるさとをつくっていかう、そういう取組みです。これを実は松戸で4年間実施してきました。これを南房総へ拡大して、展開していかうというものです。

取組みの概要は、学長を中心として、組織の中でやっていくわけですが、特に、カテゴリーとしては、地場産業の活性化、既存商店街の活性化、地域の子育て力の向上、そして、何よりも地域を愛する人間が育たなくてはならないということで、地域意識の高揚、この4つのカテゴリーに基づきまして実施しています。

カリキュラムとしては、短期大学ですので、保育科と総合文化学科2つの学科で、全員必修科目を設定しました。それが社会貢献の理論と実践、地域貢献活動の実践でして、90分の授業を2年間で30回やるということになっています。

その他に、既存の授業にも地域貢献あるいは地域志向をどんどん積極的に取り入れていきます。私ども総合文化学科で話しますと、中に10のコースがありまして、全部で250の科目があります。こんなにある短期大学は、全国にもないと思いますが、その250の科目で、先生方が学生と共に地域貢献をしています。例えば、第6次産業の育成にあたって、地域のネギの用途を拡大しようということで、取り組んでいます。ネギの植え付けから収穫までやって、さらにその上で、マフィンや、健康ラーメンなどを開発しました。さらに地域意識を高揚するために、地域のカルタをつくったり、絵本をつくったりして、小学校45校に配布したりしています。

こういった活動を南房総市でこれから展開していかうと考えていますが、まず最初に、ヤマト水産という会社と私どもが連携しまして、ヤマト水産が南房総市につくっている大型の商業施設の中で、デニッシュ、パンをつくって欲しいという話がありまして、私どもの学生が取り組みました。その結果、現在、デニッシュ3種類の発売にいたりしました。なお、これについては、ヤマト水産を私たちが直接知っているわけではないものですから、実は千葉興業銀行が、私どもが事業を展開していく上での重要なステークホルダーとなっています。ここで地域のニーズを私どもに教えてもらい、こういうのをつくって欲しい、ということを経営者ができまして、これに応え

ていくということです。

なお先ほどデニッシュ3品種といいましたが、学生は、実は20種類のこういったパンやメロンパンをつくりました。その中から、商品化になったのが、3種類ということです。

これから、南房総市で展開していく上では、何よりも地域が活性化するためには産業が振興しなくてはならない、そしてこれを拡大しなくてはならない、ということで、産業振興支援、商店街への振興支援、子育て支援などの活動を私どもは計画しています。

さらに私どもの基本的な考え方として、産業の振興、活性化に関わることだったらどんどん千葉県内でやっていこうということで、これもステークホルダーからのニーズを収集しまして、香取市でも始めています。マッシュルームの用途を拡大して欲しいという要望がありました。私どもで、この用途を拡大するための和風のマッシュルーム弁当を開発いたしました。学生がです。そして、この11月に商品化して、万葉軒という千葉の大きな弁当屋さんから販売されることになりました。

今後の課題ということでは、何よりも、私ども、産官学全体がやはり協働していかなくては、なかなかこういうことはやっていけないだろうと思います。そして地域のニーズを的確に吸収していかなければいけない。本当に大学生の力を地域が求めているのか、この辺をきれいにわきまえていかないといけない、と考えています。

特に、これからは、単発ではなくて、例えば南房総市をもっともっと活性化させるためには、その南房総市で、コミュニティビジネスを育成していかななくてはならない、と私どもは考えています。南房総市も大変熱心に取り組んでいますので、ぜひそれを実現していきたい。そのためには、私どもでは、カリキュラムの改正を含めまして、学生の育成をしていきたいと考えています。その辺が一番の課題と考えています。

平成28年10月11日(火)

文部科学省 地(知)の拠点大学による地方創生推進事業

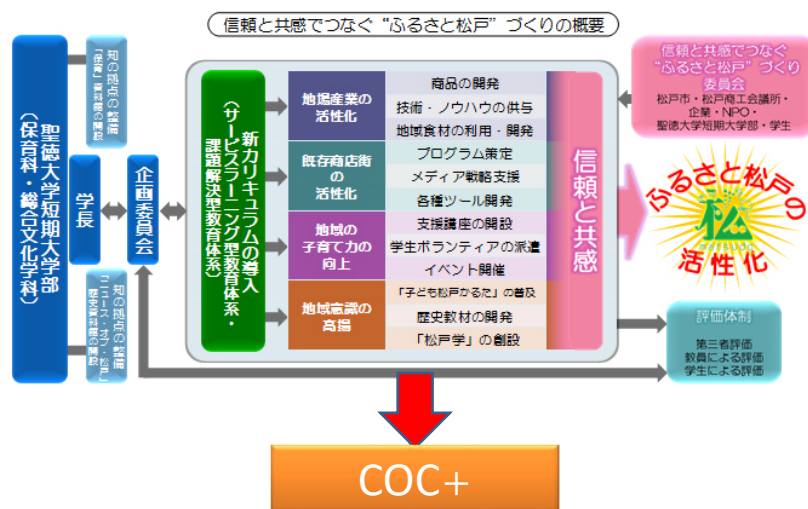
信頼と共感でつなぐ “ふるさと”づくり 松戸から南房総へ **COC+**事業



聖徳大学短期大学部

野中 博史

1 COC・COC+取組みの全体像

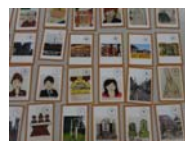


2 COCで新設した地域志向カリキュラム

	保育科	総合文化 学科
社会貢献の 理論と実践 (15コマ)	2年前期	1年後期
地域貢献活動 の実践 (15コマ)	2年後期	2年前期

3 既存科目の地域志向化

科目名	成果(ツール)	担当学生の所属 した ブランチ (コース)
DTPオペレーショ ン演習Ⅰ・Ⅱ	食材見本市「千産千商」ポスターの制 作、地域の商店のポスター制作、保 育相談のポスター制作	文芸・編集、図書 館司書
ルポライティング Ⅰ・Ⅱ	地域の名所・旧跡、飲食店などを網 羅した地域観光雑誌「彩」を制作、地 域の公立図書館や市役所、商工会議 所、企業などに配布した。	文芸・編集、図書 館司書
日本の文化Ⅰ	「松戸子どもかるた」の試作品を製作。 松戸市教育委員会を通じて松戸市内 の公立小学校45校に1校当たり1 セット、教育委員会に20セットを寄贈 した。	文芸・編集、図書 館司書
日本の文化Ⅱ	松戸昔物語を絵本化して、松戸市教 育委員会を通じて松戸市内の公立小 学校45校に1校当たり5部を寄贈し た。	文芸・編集
広告コピーワー ク	食材見本市「千産千商」に関わる キャッチコピーや、企業と連携して開 発した商品の名称を考案した。	文芸・編集、図書 館司書
調理実習Ⅲ・Ⅳ	地域の食材「ネギ」を利用して、地域 の企業と連携し調味料を使用しない 「ラーメン」を商品化した。	フード・調理、幼 児栄養
製パン入門Ⅰ・ Ⅱ	企業と連携して、地域の食材を利用 したメロンパンを開発、商品化した。	製菓
フランス菓子入 門Ⅰ・Ⅱ	企業と連携して、どら焼きを商品化、 地域にちなんだ商品名をつけた。	製菓、デザイン・ インテリア
栄養学総論	地域の企業と連携して、地域の食材 を使ったマフィンの商品化した。	フード・調理、幼 児栄養



4 南房総市でのCOC+事業の展開

ヤマト水産(株)と連携し、南房総市内の大型商業施設内のベーカリーショップで販売するデニッシュを開発、レシピを提供(27年度から実施)。

ヤマト水産 → 千葉興業銀行 → 聖徳大学短期大学部



販売されたデニッシュ各種

*千葉興業銀行はCOC及びCOC+事業を展開する上での重要なステークホルダー

5 南房総市での今後の展開

【大学からの提案】

●産業振興支援

地域の食材を生かした食品開発とレシピの提供 等

●商店街の振興支援

地域の食材を用いた商品開発 等
各種キャラクターの開発 等

●子育て支援

子育て相談の実施など

●学生の南房総での活動

学生による現地でのインターンシップ

【地域の希望】

- ・今後の話し合い。
- ・学生が現地で活動すること。



6 地域の雇用創出に向けての考え方

- 産業の活性化を支援することで地域の雇用創出に寄与
- 地域の魅力づくりを支援することで雇用の創出に寄与
- 地域の子育てを支援することで地域への定着に寄与

*南房総市に限定せず、ステークホルダーとコラボして千葉県内の人口流出地域で幅広く産業支援、地域の魅力づくり支援を展開する。その結果として千葉県内の人口流出地域での雇用創出につなげる。



千葉県香取市での取組



7 今後の課題

- 産官学の協働の実現
 - 地域企業との連携による産業振興支援
 - 長期インターンシップ
 - 地域の魅力づくりへの貢献
- 地域ニーズの的確な吸収
 - 南房総市内の産業界・子育て機関等との事業連携が必要？
- 地域がどれだけ大学生の力を求めているか（地域の理解）
 - COC, COC+の活動はボランティアではない。
- 時間的・空間的遠さ
 - 片道約120キロで学生の移動が困難さを伴う。

木更津工業高等専門学校の COC+の取組み

大枝 真一 木更津工業高等専門学校



私たちは大学と違うので、最初に質問したいのですが、木更津高専のことをご存知の方って、どれくらいおられますか？これだけの方の手があげられたのであれば、説明するのもなんなのですが、少し説明させていただきたいと思います。

私も木更津高専は大学と違いまして、中学校を卒業後に、5年間の一貫教育を行っている高等教育機関になります。高専を卒業後は、就職をするか、あるいは大学に編入学するか、あるいは本校にある専攻科に入学をして勉学を深めていくというような学校になります。本校の特色としては、立地条件がこの木更津というところにあるのですが、東京に近い、それから羽田に近い、成田にも近いし、千葉・横浜にも近いという立地にあります。卒業後はこういった企業に現状では就職していく学生が多いということがあります。

本校は5学科からありまして、機械工学科、電気電子工学科、電子制御工学科、で、私、情報工学科の教員ですけれども情報工学科、環境都市工学科、の5学科からなります。それぞれ5学科ごと40名ずつの学生がいて、1学年で200名、5学年で1000名の学校となります。

本校の特色としては、半分の、大体200人のうちの100名が進学をしていきます。大学への編入学、それから先ほど申し上げた専攻科の入学、それから半分が就職をしていきますが、非常に高い求人倍率が今のところ。大体100名に対して、2300社ぐらいの求人がきますので、就職を希望する学生はほぼ就職ができるという状態です。

本校のCOC+に向けた取組みですが、5学科ありますが、コミュニティが大学と比べて非常に小さくて、教員の数でいうと各学科10名程度となります。したがって、横同士のつながりが深くとれますので、こういった学際的な教員たちがとりくんで、いろんな農工関連であるとか、情報セキュリティ、医療・福祉に関係するようなプロジェクトを組んでいます。

そうしたプロジェクトを組むと木更津高専のだれだれ先生というよりは、各プロジェクトに焦点があたると考えていますので、例えば、海苔の養殖診断を行ったり、あるいは植物工場の画像診断を行ったりというところが、民間企業、官公庁や他の大学との連携をしやすくなるような形となると考えており、こういったプロジェクトを今立ち上げているところです。

このような中で、木更津高専は木更津市と包括的な連携協定を2年前に結びました。木更

津市と木更津高専が連携して、活力のあるまちづくりをしていきたいというような内容です。具体的には2つほどありますので、これらについて紹介したいと思います。

まず1つ目ですが、血液検査データをつかって、健康診断、それから保健師さんがいろんな活動していますが、そういった活動の可視化を行うような共同研究を行っています。実際に現状では特定健康診断を受ける人が40代の方が少なくて、そういった方に健康診断を受けてもらうことで、予防になったり、あるいは早期発見ができるのですが、保健師の取組みというのは多岐にわたるので、こういった活動にどれくらい効果があるかというのがなかなか見えにくいという現状があります。そのようなデータを用いて、可視化をするというような研究を進めています。

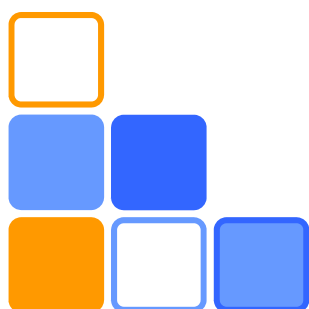
それからもう一つは、駅前にあるブックカフェです。商業施設の郊外化や、それから中心市街地の活力の衰退などがありますので、市民とそれから我々高専には国語の教員がいますので、そういった方々との交流を深めて地域に根ざした高専の強みを活かしていきたいと考えています。

最後に、課題を2つほど挙げたいと思います。一つ目は、先ほどいいましたとおり、我々としては、立地は非常によいところにあると考えていますが、東京や千葉、横浜の方から見ると、地方都市、田舎の方に感じられるということもあって、なかなか大きい企業がなかなかでてこないという課題があります。

2つめは、そういったことにも関連しますが、やはり学生たちが地域にある企業よりも、高専を卒業したら、東京や千葉、神奈川に就職をするのだという意識が高いものですから、なかなか地元で根付いた就職がないということがあります。

これらについて今後、より一層取り組んでいかないとけないと考えています。

COC+に向けた木更津高専の取り組み



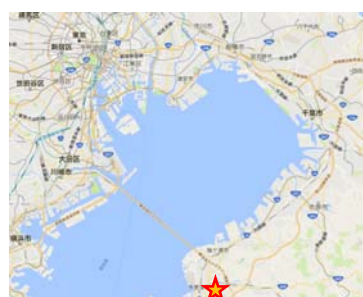
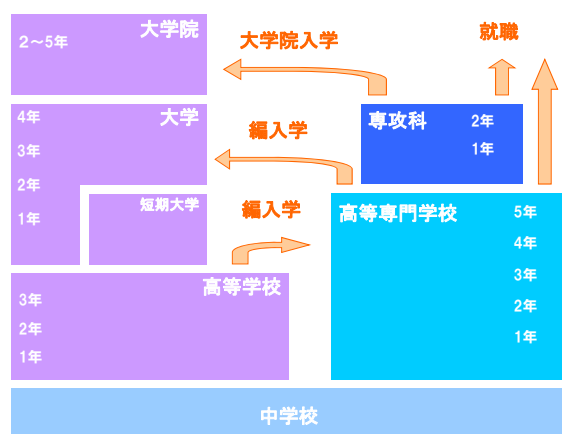
木更津工業高等専門学校
情報工学科 大枝真一

千葉県COC+シンポジウム
2016年10月11日

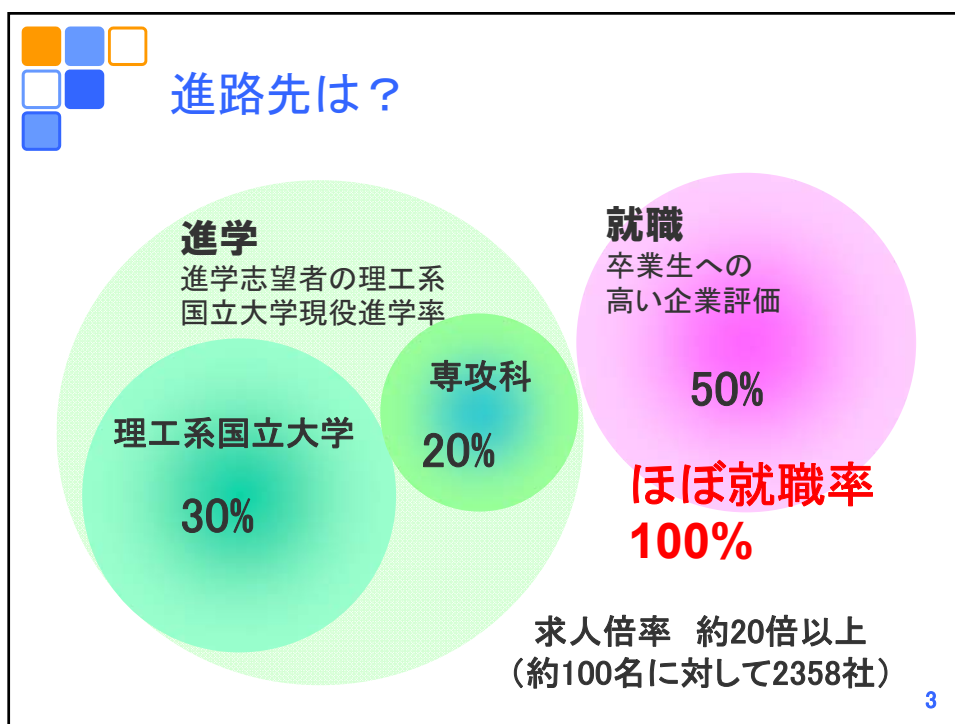


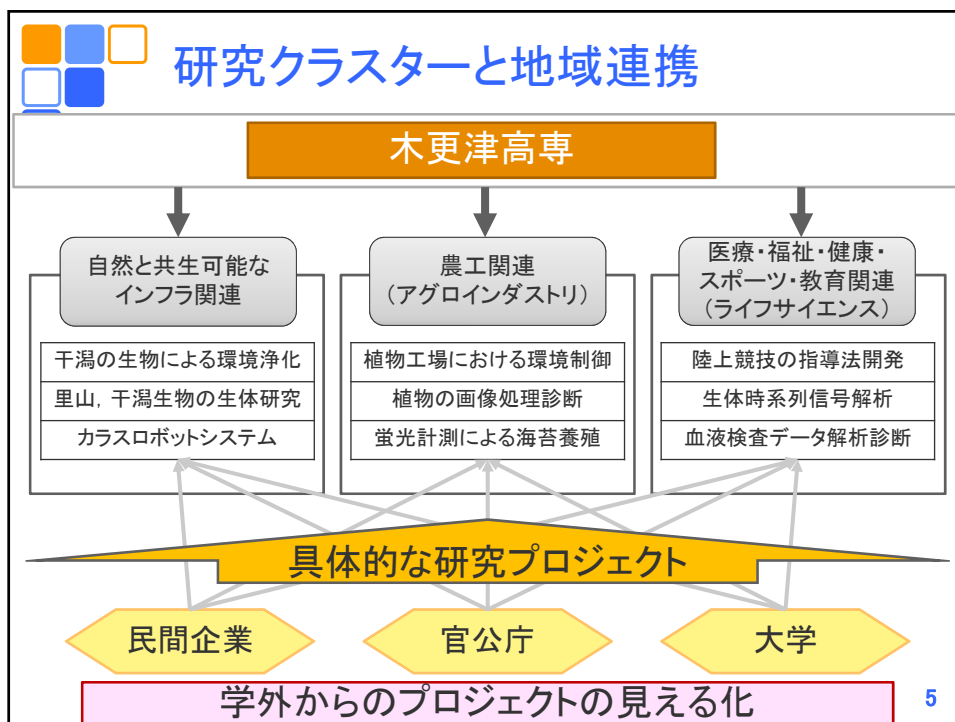
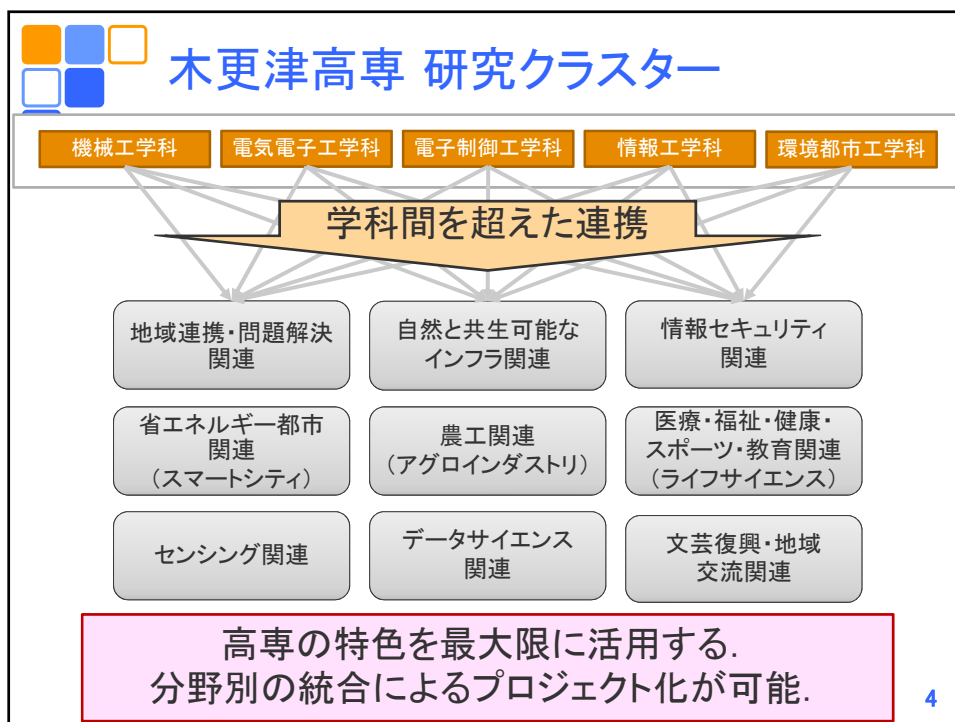
木更津高専とは？

- 国立の高等教育機関
- 創造性重視の5年間一貫教育
- 多様な進路選択



5年(7年)間の
一貫教育





木更津市との包括的な連携協定

木更津市: <http://www.city.kisarazu.lg.jp/14,41805,40,266.html>
木更津高専: <http://www.kisarazu.ac.jp/news/2015/0210.html>

独立行政法人国立高等専門学校機構木更津工業高等専門学校との包括的な連携協定について

木更津市と木更津高専は包括的な連携協定を締結しました。

経緯について

高等専門学校は、高度成長に伴う産業界からの強い要請に応じて、昭和37年に工業発展を支える実践的な技術者の育成を目指し「深く専門の学芸を教授し、職業に必要な能力を育成する」ことを目的とした、高等教育機関として創設され、おおむね各都道府県に1校設置されており、千葉県では、昭和42年に木更津高専が設置されました。

このような専門性を有する貴重な教育機関であること等を踏まえ、木更津高専での本市の『市民公開講座（パソコン入門講座）』の開催や、平成12年に木更津高専に地域共同テクノセンターが竣工されたことを契機に、平成13年、本市のテレワークセンター（当時のアインビル8階）を会場に、『駅前高専』の実施など、本市との連携した取り組みを進めてきていました。

また、昨今では、平成26年10月の木更津高専を通じ台湾の苗栗市（国立聯合大学）への市長訪問や、平成27年2月の岩根西地区まちづくり協議会での木更津高専による防災に関する基調講演の実施等を行っています。

今後、これまでの経緯等を踏まえ、活力ある個性豊かな地域社会の形成と発展に寄与することを目的に、木更津高専とまちづくりに関する包括的な連携協定を締結しました。



木更津高専とまちづくりに
関して、活力ある個性豊
かな地域社会の形成と発展に
寄与することを目的



企画部情報政策課と
オープンデータ利活用による
木更津市ICT戦略の促進

木更津市教育員会と
みなとまちなかワークショップ
との推進

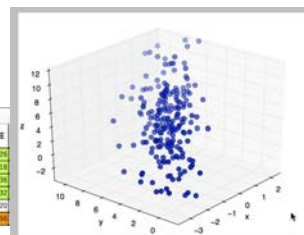
6

オープンデータ利活用による木更津市ICT戦略の促進

PCAとGMMを用いた血液検査データからの保健師指導効果の可視化

1. 所管課: 保険年金課
2. 目的: 平成27年3月に策定した木更津市保健事業実施計画（データヘルス計画）を踏まえ、生活習慣病予防に向けた今後の施策展開にあたっての重み付けや民間等によるアプリ開発等につなげるため
3. 内容: 特定健康診査のデータを分析中（2008～2015年の6万強のデータ）
※個人情報とは除く

A		B		C		D		E		F		G		H		I		J		K		L		M		N		O		P		Q		R		S		T		U		V		W		X		Y		Z		AA		AB		AC		AD		AE		AF		AG		AH		AI		AJ		AK		AL		AM		AN		AO		AP		AQ		AR		AS		AT		AU		AV		AW		AX		AY		AZ		BA		BB		BC		BD		BE		BF		BG		BH		BI		BJ		BK		BL		BM		BN		BO		BP		BQ		BR		BS		BT		BU		BV		BW		BX		BY		BZ		CA		CB		CC		CD		CE		CF		CG		CH		CI		CJ		CK		CL		CM		CN		CO		CP		CQ		CR		CS		CT		CU		CV		CW		CX		CY		CZ		DA		DB		DC		DD		DE		DF		DG		DH		DI		DJ		DK		DL		DM		DN		DO		DP		DQ		DR		DS		DT		DU		DV		DW		DX		DY		DZ		EA		EB		EC		ED		EE		EF		EG		EH		EI		EJ		EK		EL		EM		EN		EO		EP		EQ		ER		ES		ET		EU		EV		EW		EX		EY		EZ		FA		FB		FC		FD		FE		FF		FG		FH		FI		FJ		FK		FL		FM		FN		FO		FP		FQ		FR		FS		FT		FU		FV		FW		FX		FY		FZ		GA		GB		GC		GD		GE		GF		GG		GH		GI		GJ		GK		GL		GM		GN		GO		GP		GQ		GR		GS		GT		GU		GV		GW		GX		GY		GZ		HA		HB		HC		HD		HE		HF		HG		HH		HI		HJ		HK		HL		HM		HN		HO		HP		HQ		HR		HS		HT		HU		HV		HW		HX		HY		HZ		IA		IB		IC		ID		IE		IF		IG		IH		IJ		IK		IL		IM		IN		IO		IP		IQ		IR		IS		IT		IU		IV		IW		IX		IY		IZ		JA		JB		JC		JD		JE		JF		JG		JH		JI		JJ		JK		JL		JM		JN		JO		JP		JQ		JR		JS		JT		JU		JV		JW		JX		JY		JZ		KA		KB		KC		KD		KE		KF		KG		KH		KI		KJ		KK		KL		KM		KN		KO		KP		KQ		KR		KS		KT		KU		KV		KW		KX		KY		KZ		LA		LB		LC		LD		LE		LF		LG		LH		LI		LJ		LK		LL		LM		LN		LO		LP		LQ		LR		LS		LT		LU		LV		LW		LX		LY		LZ		MA		MB		MC		MD		ME		MF		MG		MH		MI		MJ		MK		ML		MM		MN		MO		MP		MQ		MR		MS		MT		MU		MV		MW		MX		MY		MZ		NA		NB		NC		ND		NE		NF		NG		NH		NI		NJ		NK		NL		NM		NN		NO		NP		NQ		NR		NS		NT		NU		NV		NW		NX		NY		NZ		OA		OB		OC		OD		OE		OF		OG		OH		OI		OJ		OK		OL		OM		ON		OO		OP		OQ		OR		OS		OT		OU		OV		OW		OX		OY		OZ		PA		PB		PC		PD		PE		PF		PG		PH		PI		PJ		PK		PL		PM		PN		PO		PP		PQ		PR		PS		PT		PU		PV		PW		PX		PY		PZ		QA		QB		QC		QD		QE		QF		QG		QH		QI		QJ		QK		QL		QM		QN		QO		QP		QQ		QR		QS		QT		QU		QV		QW		QX		QY		QZ		RA		RB		RC		RD		RE		RF		RG		RH		RI		RJ		RK		RL		RM		RN		RO		RP		RQ		RR		RS		RT		RU		RV		RW		RX		RY		RZ		SA		SB		SC		SD		SE		SF		SG		SH		SI		SJ		SK		SL		SM		SN		SO		SP		SQ		SR		SS		ST		SU		SV		SW		SX		SY		SZ		TA		TB		TC		TD		TE		TF		TG		TH		TI		TJ		TK		TL		TM		TN		TO		TP		TQ		TR		TS		TT		TU		TV		TW		TX		TY		TZ		UA		UB		UC		UD		UE		UF		UG		UH		UI		UJ		UK		UL		UM		UN		UO		UP		UQ		UR		US		UT		UU		UV		UW		UX		UY		UZ		VA		VB		VC		VD		VE		VF		VG		VH		VI		VJ		VK		VL		VM		VN		VO		VP		VQ		VR		VS		VT		VU		VV		VW		VX		VY		VZ		WA		WB		WC		WD		WE		WF		WG		WH		WI		WJ		WK		WL		WM		WN		WO		WP		WQ		WR		WS		WT		WU		WV		WW		WX		WY		WZ		XA		XB		XC		XD		XE		XF		XG		XH		XI		XJ		XK		XL		XM		XN		XO		XP		XQ		XR		XS		XT		XU		XV		XW		XX		XY		XZ		YA		YB		YC		YD		YE		YF		YG		YH		YI		YJ		YK		YL		YM		YN		YO		YP		YQ		YR		YS		YT		YU		YV		YW		YX		YY		YZ		ZA		ZB		ZC		ZD		ZE		ZF		ZG		ZH		ZI		ZJ		ZK		ZL		ZM		ZN		ZO		ZP		ZQ		ZR		ZS		ZT		ZU		ZV		ZW		ZX		ZY		ZZ	
番号	受診年	個人 性別	個人 年齢	個人 体重	個人 身長	個人 BMI	個人 中性脂肪	HDLコレステロール	LDLコレステロール	AST	ALT	γ-GT	血糖値	収縮期血圧																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																											
42041	2012	男	60	健康診断	150.2	58.8	26.1	42	177	82	111	22	25	75	5	126																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																									
42041	2013	男	60	健康診断	151	58.5	25.7	40	157	94	126	21	25	22	4.6	114																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																									
42041	2014	男	61	健康診断	155.3	57	26.1	39.3	186	82	156	30	30	39	4.2	136																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																									
42041	2015	男	63	健康診断	165.3	70.8	26	88	71	73	96	38	24	85	6.1	132																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																									
42044	2019	男	64	健康診断	165.3	68	24.8	84	106	86	80	35	22	63	6.3	120																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																									
42044	2020	男	67	健康診断	165.3	70.8	25.8	81	64	90	92	37	23	111	6.5	134																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																																									





市民体験プログラム・みなまちSKIP! みなまちブック・カフェ



地方都市の課題

商業施設の郊外化
中心市街地の活力衰退

地域交流の場を作る

本を介した交流の場
世代や立場を超えて人と人がつながる
スマートフォンやPCを利用したメディアシステム



地域に根ざした高専の
強みを活かす

8

ディスカッション



アメリカでのCOC+のような取組み

鈴木(千葉大学)

それでは、これからパネルディスカッションに移りたいと思います。

壇上には、今ご報告をいただきました、私を含めて6名の大学の報告者と、メルヴィルさんに加わっていただいています。

テーマとしましては、まず各大学の取り組みとして、教育と産業振興がありましたが、それについて、簡単な感想をいただきます。より時間を使いたいのが、皆様のほうからいただきました課題についてで、それらに具体的なアドバイスをいただければと思っています。

そして、最後は大学間連携についてです。千葉県内で、総合力をあげて取り組んでいくための大学側の連携はまだできておりません。そういったものについて、大学の先生方も含めまして、時間の許す限りディスカッションできればと考えています。

それでは、まず簡単な質問なのですが、ある一つの都市や地域に対して、COC+と同じような取組みや似たような取組みが、アメリカではあるのかどうかということについて教えていただければと思います。

John Melville

私が、プレゼンテーションの中でとりあげた実例のコロラド州は、人口的には千葉県に似通っているかもしれません。コロラドは、より幅広いプログラムを持っていました。COC+のようなものだと思います。彼らのプログラムは、産業界による協働を州の色々なところで奨励するものです。そのうちの 하나가、北コロラドということで、そこでは、かなり進んだ製造業の協働がありました。コロラドでは、4年間という期間で、21の産業界による協働がつくられました。そして、コロラドは、産業界による協働がアメリカでもっとも多い州です。

州政府の優先課題は、産業界がリードする産業界による協働を州中に推進するものです。これが、たぶん一番千葉県に近い例だと思います。そこで学んだことは、産業界がまず集まるということが重要であるということ、そして地域と協働するということが重要であるということです。また、大学、政府、自治体、企業などのチームが集まって、産業界をまずまとめる。そしてその後は、業界が優先課題を決めて、パートナーとして、この優先課題に対応するということです。先ほど示したこのプロセスは、この産業界による協働がやったわけです。これは現在でも続いています。そして効果的な形で、地域において優先課題をもとに集まるということです。

コロラドの多くの地域も同じような状況にあります。千葉と同じようにやはり若者が流出している状況です。また、雇用機会がない、雇用機会が減っているということ、また業界がもっと成長できるはずであるということです。産業界による協働というのは、彼らにとって、連携する方法であったといえます。そして、さまざまな異なる形、今までとは違ったやり方でできたと考えています。他の州も同じようなことをやっています。例えばカリフォルニアもそうで、私どもはそこで協働しています。彼らのイニシアティブは、スリングショット・イニシアティブという試みです。これはカリフォルニアの10ヶ所で行われています。そこでは、チームが形成され、プロジェクトを実行したり、戦略を立てたりしています。そこでは、企業をその産業界ごとに関与させています。そして、その産業界を支援する、また、そこに住んでいる人たちを支援する戦略を立てています。そうすることによって、自らのキャリアの中で、移動が可能になるということです。これがカリフォルニアの戦略です。そこでも同じようなアプローチをとっているといえます。

鈴木(千葉大学)

今の説明では、大学のロールが少しよく分からなかったのですけども。あまり大学の関わりが強いという形ですか。

John Melville

いいえ、大学が関わっています。この2つのケースでは、それぞれの地域ごとに、大学がより幅広いチームの一員であるということです。ただ、そこでリードするような組織とはなっていないわけです。最初の段階は、業界を集めるために支援します。彼らの方がけん引したり、具体的にどこまでリードするというものではありません。

ここでの教訓はこのような初期の段階においては、取り組みのための動きをまずもたすということ。そして、そこに注目させるということです。そして、個々の事業者、企業とも連携をするということです。追加の企業に加わってもらって、コンソーシアムでも連携してもらおうということが次のステップになると思っています。それが、大きな影響を与える方法だと思っています。アメリカでも同じような経験があります。

地域を出て行った若者と連絡を取り続ける

鈴木(千葉大学)

ありがとうございます。それでは、具体的なやりとりに入っていきたいと思います。

まず、各大学の取り組みについて、質問も含めて進めていきたいと思います。まず教育分野の取り組みですが、千葉大学と敬愛大学では、副専攻あるいは、サティフィケートプログラムを進めています。もちろん、各大学でも地域振興をやっていく中で、教育という力を使いながら、進めているのは十分伝わってきましたが、まずは千葉大学と敬愛大学の取り組みと千葉大学が最後に教育分野での課題として出ささせていただきました、例えば、大都市マインドを持った学生をどうやって地方に向かわせるのかという問題、あるいは、4年間で地域志向の人材育成ができるのかどうか、ということについてお答えをお願いいたします。

John Melville

まず最初に、千葉の学生が、いったんは千葉を離れて、再び戻ってくるということは、必ずしも悪いことではないと思っています。私の経験では、ある地域で成長して、そこを離れて他の地域で経験を積んで、再び戻ってきて、さまざまな経験をローカルに適応することになると、非常に多くの起業家精神や、エネルギーを生み出すことができると思っています。1つの地域だけに一生残るということと比べて、そのような機会が存在すると思っています。ですから、例外は存在するということです。

一つの見方は、100%の学生を一つの地域で維持させられないし、たぶん学生も望んでないと思います。多くの若者がいろいろな外に出たりして、経験を積んでほしい。しかしながら、そのカギは、もっとたくさんの人に戻ってきてほしいということだと思っています。そしてできる限り、そういう若者に、ある経験をもちながら残ってもらうということです。そういう形で見てほしいと思います。

それと同時に、連絡を取り続けてほしいということです。若者がこの地域を離れて、さらに高等教育に進むとか、最初の仕事を得る、都市のエキサイティングな側面がほしいということかもしれませんが、常に連絡は取り合ってほしいと思います。こういうことをやっていない地域がかなり多くあります。アメリカでもそうですが、努力をして、離れた人たちとも連絡を取り続けるということです。

例えば、オクラホマ州のオクラホマシティもそのうちの一つです。この地域は、ダラスほどエキサイティングな場所ではありません。学生がオクラホマシティを離れてダラスに行って、最初の仕事に就きます。しかし、人生のある段階になって、再び故郷に戻りたいと考えるわけです。その理由は、家族を故郷で育てたいとかという理由です。オクラホマシティが、彼らと連絡を取り続けていたので、彼らが、自分たちの故郷で何が起きているか知っている。雇用状況も、そしてオクラホマシティが提供するチャンスも知っているということです。オクラホマシティは、若い人たちを再び戻すという意味で、大変成功しています。スキルとか、起業家精神をもった若者を再び地域に引き付けることができている。それは、連絡を取り合っていたからできたことです。なので、連絡を取り合ってほしいのです。

そして、たとえその地域から出なかったとしても、起業家精神を持たせるための機会を与える必要があります。起業してもらう、小さな事業を始めてもらう。若者に本当の意味でのチャンスを与えてください。失敗するかもしれないし、成功するかもしれませんが。いずれにしても若者がトライできるようなことをするということです。東京では、そのリスクが高すぎますよね。大きな

組織で失敗してしまうと、なかなか立ち上がれない。千葉では、若いうちにそういったチャンス
をあげてはどうかと思います。私としては、このことを強調したいです。より早い経験を学生に
提供する。若者にとって、意味のあるそういう場を提供することで、フックとして、千葉県につな
ぎとめることができると思います。そして、もし一時的にどこか他のところへ行っても、きっと帰
ってきてくれることでしょう。1つや2つだけではなく、全ての戦略を使うことによって、長期的に
成功させることができると思います。

鈴木(千葉大学)

ありがとうございました。同じく教育でサティフィケートプログラムをやっている敬愛大学の藪
内さんからの課題ですが、最後の学生の地域愛、地元愛を育てられるのかというのは、今と同
じような質問と考えてよろしいでしょうか。あるいは、もう少し詳しく知りたいことがあれば、願
いいたします。

藪内(敬愛大学)

大都市に向きがちな学生の意識を地元に向かわせるために、地元愛を育てることが非常に
必要だと理解していて、具体化していくべき課題だと考えていましたので、今のメルヴィルさん
のお話は、非常に参考になりました。

つながりという言葉がキーワードだと考えています。最近、高校が廃校になるということを防
ぐために色々努力して、成果もあがってきているという例で注目されている隠岐島の隠岐島前
高校というところに視察に行ってきました。地域を知る、地域につながった子どもたちを育てて
いくという、そういうことを非常に心がけているのですが、その時に、ふるさとにつながっている
だけではなくて、外ともつながっているということが大切だということを思いました。

つまり、つながりという言葉が、地元、生まれ育った故郷につながっていると同時に、よそと
もつながっている。それはどういうことかということ、この高校は、入学定員の3割を上限として、
島留学を全国から募集しているんですね。3割を超えると、島のための高校でなくなるというの
で、30%に抑えているのだそうです。入学定員の3割というと24人なんですけども、最近では
100人以上の希望者がくるんだそうです。

ですから、今おっしゃった、千葉の人口流出地域の子どもたちが高校なり、大学なり、あるい
は就職なりで外に出て行くときに、つながりを維持するという今のお話は非常に必要なことだ
と思いますし、同時に外とつながることのネットワークになっていると考えたらいいと思いました。
東京にいて仕事をする、大阪にいて仕事をする、アメリカに行って仕事をする、そういう人
達とつながりを保つと、地元と世界がつながっているということが維持される。そういう意味を
持つと思うので、つながりということは非常に大切だと思っています。

鈴木(千葉大学)

はい、ありがとうございます。それでは、続きまして、千葉工大さんの方の取組みに移りたい
と思います。先ほどいい足りなかったところがありましたら、鎌田さん、お願いいたします。

パブリックセクターの役割

鎌田(千葉工業大学)

配布資料の最後の方に、3つほど課題をあげさせていただいたのですが、大体、先ほど伺ったお話でクリアできていますので、ちょっと違う観点からぜひ伺いたいことがあります。

市町村の皆様方と付き合っていて、本当に意欲あふれる危機感、これはもう今やらなきゃ、町がほろんでしまう、また、将来こういう夢があるというのを持っています。という意味では、日本でどうしてもパブリックセクター自体は、均等に、平和に、調整をして、というようなところが強いのですが、特に、私、南房総市さんと付き合い長いのですが、チャレンジ精神にあふれていて、なんていうのですかね、南房総市さん、今日も大勢来てらっしゃいますが、パブリックセクター自体がチャンピオンになる、例えば千葉の全域の、パブリックセクターがチャンピオンになるというのは、あってはいけないことなのかもしれないですが、それほどパブリックセクター同士で切磋琢磨しながら競争して、それが一つのエネルギーになった結果として多くの受益者が増えていく、ということこそ、パブリックではないかな、というような思いがします。そういう意味で、日本特有の武器かもしれないけど、パブリックセクター自体がいろんなものをけん引していくというのはありうるのかどうか、あるとしたら、ちょっと日本型としていけるのではないかなと思うのですが、いかがなものでしょうか。

John Melville

ありがとうございます。素晴らしい質問です。私は、パブリックセクターというのは、仲介者として、つまり最初の部分を司さどるということがあると思いますが、気をつけなければいけないと思います。パブリックセクターがけん引者になってしまうと、産業界は参加しなくなってしまうと思うのです。けん引するのは誰なのか、優先課題、優先順位を考えるのは誰なのか、責任をもって協働して、違いを生み、影響を与えるのは誰なのかということをまず考えないといけないと思います。もし、パブリックセクターが、あまりにも主導権をとりすぎてしまうと、ありがちなものですが、その状況が非常に泥沼化してしまいます。船頭を多くして、船山によるということになってしまうと思います。産業界を中心に協働すれば、もっと素晴らしい経済をつくり出すことができます。

ですから、大学に対して伝えたいのは、大学は、非常に重要な役割があるということです。まず会話のレベルを上げるということです。そして、野心や、やりたいという気持ちを高めていくということです。それは正しい情報、データに基づいてやってほしいと思います。そしてその大学の学生のエネルギー、教員のエネルギー、素晴らしいエキサイティングな仕事をしている教員、学生たちを使って、解決の一助にしてほしいと思います。大学は、そのテーブルに差し出すだけの汗と資源をもっているわけです。業界のリーダーシップに資する支援をする。つまりきちんと組み立てられる要素をもっているわけです。だけど、あまりにもパブリックセクターが率いてしまうとうまくいかないと思います。

鎌田(千葉工業大学)

伺ったことも分かるのですが、今の状況も地方の追い込まれた、先ほどの島根県の隠岐島もそうですけども、そんな稚拙なパブリックセクターはあんまりいいかなと思います。がんばれるところは、最初に、じょうずに裏に回って火をつけて、さっと表に、プライベートセクターをだして、大学をうまく活用して、その進化もとても素晴らしいものがあるということを伝えたいと思っています。その辺りも、できれば視察をしていただいて、その部分も理解した上で、教えていただくとありがたいかなと思いました。

鈴木(千葉大学)

ありがとうございました。次は千葉科学大学の伊永先生にお願いしたいと思います。先ほど頂きました課題としては、さまざまな取組みが女性の雇用にはつながっているけれど、若者の雇用にどうつなげられるかということでしたが、何か補足がありますでしょうか。

大学は一步下がる

伊永(千葉科学大学)

少し全体的にお話させていただきますが、私どもの大学は、まだ経験浅いのですが、26年度からCOC事業を進めています。防災を使つてのまちづくり、まちおこしを中心に考えているのですが、そのために、「千葉学」と同じような地元学として、「銚子学」というのを全くゼロから積み上げてきました。この講義の最初は銚子市長がやると、ということで、市長は「銚子学のすすめ」ということで、1時間話します。というようなところからスタートしています。講義は地元の方に主に出演していただいています。地元のいいところをしっかりと宣伝するような授業を組んでいます。それで、一通り地元のいいところを聞いたところで、まち歩きということで、学生が地元のリーダーとともに、まちを歩く、あるいは、地元でボランティア活動する、あるいは、銚子ジオパークという名所がありますので、そういうところも見に行くというようなことで、地元をよく知るようになります。こういうことを通じて、それまでは、全く銚子のことを知らなかった外部から来た学生たちも、銚子のことを知ることができる。それどころかずっと銚子に住んで高校まで銚子にいたのだけど、この銚子学の必修講義を聞いて、初めて銚子のことがわかったというようなケースもでてきて、そういうことが、若者の地元定着につながればいいなという気持ちはもっています。しかし、そう単純ではないだろうというほうが、本音になります。

それで、先ほどいいましたように、いわゆる缶詰をつくるわけですが、缶詰の中でも災害にあって、避難した方々がもうこんなもの毎日毎日食べられないというようなことにならないで、毎日食べても飽きがこない。健康にも健康増進にも効果があるっていうようなものができる可能性があるのではないかと。それも銚子の産品は海の幸からキャベツ、大根、にんじん、とうもろこしと様々ありますので、そういうものをあわせた缶詰であれば、長い目で見て、機能性食品としても役立つようなものをつくれるのではないかと。そういうことが、企業側のもくろみです。私どもは実は企業を中心にプロジェクトを動かしてしまして、銚子市とか大学は、どちらかといえ、一歩下がっています。学生は前に出ていっていいんですが、大学はなるべく一歩下がって、

世話役に徹しようというようなことで今のところ進めています、そういうやり方でよろしいのかどうか、メルヴィルさんに教えていただければありがたいです。

John Melville

そうだと思います。このプロジェクトの特性を考えると、多くの企業が参加して、色々な面で貢献することができるものだと思います。

災害被害者のための食品は、色々な形の応用が可能だと思っています。また、多くの企業が参加できると思います。学生、特に若者が情熱をもって、人々を助ける、特に災害被害者を助ける。企業とも関与したいということですが、大学が関わるが、あまりにも強くけん引しないというのは、よいやり方だと思います。そしてその方向を変える必要がある場合は変えるということです。多くの企業が集まった場合には、もっと違ったやり方をするというので、時間をかけて柔軟性をもつというのはよいと思います。しかしながら正しい軌道に乗っていると私は思います。

鈴木(千葉大学)

ありがとうございました。続きまして、聖徳大学の野中先生の方からお願いいたします。

都心に出ていった若者とつながる方法

野中(聖徳大学短期大学部)

私ども COC+を展開しているのは、先ほどお話したことで、すべてです。課題も含めて、すべてですが、メルヴィルさんに、そういった取組みをさらに効果的にするために、少しお聞きしたいことがあります。

一つは、先ほど、メルヴィルさんがオクラホマシティからダラスに一旦行った学生がつながりをもっていると、またオクラホマシティに帰ってくるというお話がありました。日本でいえばUターンだと思いますが、そのUターンするだけの魅力として、オクラホマに何があるのでしょうかというのが1点です。

それから、つながりをさらに強調されていましたが、つながりというのは具体的にどういうことなのか、私たちも産官学でつながろうといっていますが、その離れた場所とどうやってつながりをもたしていくのかもお聞きしたいと思います。

John Melville

それでは、最初の質問に答えたいと思います。何がオクラホマシティに人々を戻らせているかということですが、大きなことが2つあります。まず1点目です。彼らが惹きつけられるのは、そこでまず成長したということです。家族に友好的な場所であって、子どもたちをそこで育てたいと思うわけです。子どもを育てたいと思った時、あるいは親が年とってきているから家に戻りたい、そして、地域に戻ってきたいという感情があります。問題は、その経済的な機会、雇用機会ということでは、時代遅れの考えを持っているかもしれないということです。この20年間で、オクラホマシティは大きく変わりました。以前の経済は石油ガス関係でしたが、今はもっと多様

化しています。ハイテク産業もあれば、医療関係もあり、非常に多様化された経済となっています。チャンスがより増えてきています。そして、オクラホマシティは、その機会が変わったということを出ていった人たちに伝えてきています。これらの2つのことで、よくなっているということです。オクラホマシティは成功しているので、その話をすることができます。

千葉県に関しても、変化してきています。オクラホマシティのような状況ではないかもしれませんが、こちらの方がもっとチャンスがあると思っています。若者へのチャンスが存在していると思いますので、きちんと表面化し、明確にしていかなければいけないと思います。

では、そのやり方はどうするべきか。千葉チャンピオンにその話をしてもらおうということです。また、企業の人たちで、本当にエキサイティングなことをやっている人たちに、業界の話を大きな声で語ってもらおうということです。そして、新しい商品、新しい市場参画、新しい技術の適用で何をやっているかということ、人々を驚かせるようなことをやっている、ということ。これは新しい起業家精神によって生まれているということを語ってもらいたい。これは、今後5年後には、さらに大きくなっていくわけです。

今の段階で、千葉の若者と東京に出ていった若者に意識調査をします。彼らにどのようなチャンスがありますか、と聞いても、たぶん彼らは、正しい答えはできないと思います。現在存在している機会ではなく、少し違った答えをしてくると思います。なぜかという、それをきちんと伝えられていないからです。これが第1歩となります。

第2歩目は、今後数年かけて、さらに機会をつくっていくということです。そうすればこのストーリーはもっと説得力のあるものになってくるということになります。そして、オクラホマシティのような、人々が戻ってくるような状況になってくると思います。

オクラホマシティは、就職のために、地域を出ていってしまった卒業生のリスト、住所録をきちんと管理して、オクラホマシティがいかにエキサイティングかという話を、発信し続けていたわけです。ダラスには行っているわけですが、常にEメールなどで、アップデートの情報を送るわけです。オクラホマシティはこんなに変わったよ、おもしろいよと。自分が育った町でこんなことがあるんだ、こんなチャンスがあるんだと、そんなこと考えたことはなかったと思う人はいるんですね。例えば、仕事を変えたい、転職したい、そろそろ家族を育てたいとか、なんらかのきっかけを考えた時に、このEメールを見て、あ、ちょっと待って、オクラホマシティのことをもう一回考えた方がいいかもしれないと、考える人もいるかもしれません。もちろん100%戻ってくるわけではないです。でも、数人戻ってきて、また彼らが話をする。この年代の人は、互いにメールし合うと思うんです。テキストメッセージを送って、だんだんと広がっていく。SNSを利用して、何が千葉で起こっているか、千葉で面白いことが起こっているかチェックしなきゃ！っていうようなことになれば、5人でも戻ってくるとプラスの流れがでてくると思います。それがオクラホマシティでの秘密です。私はオクラホマシティで働いていましたから、目的をもった戦略をとっているのを見てきました。

鈴木(千葉大学)

ありがとうございました。続きまして、木更津高専の大枝先生の方から、先ほど2つほど質問・課題いただきましたが、もう一度お願いいたします。

地方の魅力を伝えるアンバサダー

大枝(木更津高専)

木更津高専では、いろんな就職をしていく学生がいるのですが、非常に就職率が高いです。しかし、それが大企業、都会の方に多いので、なんとか大きい企業を、例えば誘致等できればと考えています。木更津は田舎なので、土地が安い等があるのですが、有効に大企業に来てもらうような宣伝文句とか、そういったものがあれば知りたいなと思います。

それからもう一つは、地元の方々に私たちのやっていることがあまり知られていないので、どうしても木更津高専に行けば、東京の方に就職できるという概念がもうすでにある状態があります。なので、地元就職するという考えがあまりない状態なのです。先ほどメルヴィルさんがいわれていましたが、宣伝をする、SNS等を使うということがありましたが、まだ他にも具体的で効果的な宣伝の方法があれば、教えていただきたいと思います。

John Melville

アメリカの多くの地域で使われている有効な方法があります。人々にアンバサダーの役割を担ってもらおうというものです。それにもいろんなやり方があります。

まず1つ目です。企業の経営陣や、シニアエグゼクティブに、資料を持っていってもらって、全国会議とかビジネスミーティングで、それを配布してもらって、その地域の属性についていろいろと話をしてもらうということです。木更津高専の卒業生でも、東京に拠点をもつ大きな企業の、重役、経営陣になっている人もいると思うのです。個人にまずアプローチして、千葉を拡大していくことのベネフィットを伝え、事業の拡大も考えていただく。それが一つの戦略だと思います。故郷で育った人が、20年前から変わっているということを知らないかもしれませんね。きちんと戦略を持ってやれば、将来に向けて、改善していくことができると思います。

そしてもう一つは、若い同窓生です。まだ若い卒業生たち。その人たちに向けて、同じことをやります。会社で同じことをいってもらうのです。これは、別に難しい戦略ではありません。何もかも問題解決するわけにはいきませんが、より多くの人に影響を与えてもらうインフルエンサーになってもらい、本当の情報をより多く与えれば与えるほど結果は見えてくると思います。誰かに影響を与え、グループに影響を与える。そして、その人たちがもう一度、千葉について考えてもらう機会になると思います。なにかうまくいっているのだなと。そうすれば、例えば、企業が移転してきたり、いくつかそういう成功例ができてくれば、新しい流れ、新しい力学をつくり出すことができるのではないのでしょうか。もちろん一晩でその成功が手にできるとは思いませんが、今使っていないツールを使って、そこにいる人たちに影響を与えてもらうわけです。

まだ、その人たちに千葉のアンバサダーになってくださいというお願いをしていませんよね。ひょっとしたら、東京で働いている人が、いつか千葉に戻ってくるかもしれない。あるいは、すぐに戻ってくる人もいるかもしれない。そういったリソースをぜひ使ってほしいと思います。少しリサーチをして、見つけ出してほしいと思います。まだそういうことをしていないのなら、やるだけの価値はあると思います。

千葉ファーストで大学間連携を

鈴木(千葉大学)

ありがとうございました。千葉大学の課題は残ってはいるのですが、今までのやりとりでほぼ答えていただいたと思いますので、次のテーマに行きたいと思います。

先ほど最後のテーマとさせていただきました、大学間の連携とか、協働についてです。千葉県で産業振興を行うにあたって、いくつかの大学が関わっていますが、連携や協働についてはまだ着手できていないと思います。今回の合同シンポジウムという契機があって、何回か打合せをしている中で、そういった効果が見えてはきているかと思いますが、今後どのように進めていくのかということをディスカッションしていきたいと思います。まずは、大学のさまざまな取り組みをきいて、千葉県内で大学が連携をするということについて、メルヴィルさんからコメントをお願いいたします。

John Melville

私の考えでは、大学間の協働をどのように進めるかということを考える時には、まず千葉ファーストで考えているか、千葉を第一に考えているかどうかということを自問するべきだと思います。時にこれは難しいわけです。いくつかの大学にはしっかりと特別なアイディアやプロジェクトがあるところもあります。そして、そういった大学はそれを進めて行きたいわけです。でも、一歩さがって、これは本当に千葉にとって一番のものだろうか、つまり、千葉ファーストかということ、個々の大学にとってのベネフィットではなくて、千葉にとって、全体にとってのベネフィットかどうかということをまず考えるべきだと思います。

そして2つ目に、優先順位、そしてプロジェクトを業界主導にしているかどうかです。業界と協働しているのか、プロジェクトやさまざまな活動をどう進めていくかということを考えたときに、本当に業界がきちんとコミットして、優先順位を高くもってやってもらえることか、ということ聞くべきだと思います。そして、私たちはそれをどのようにオペレーションしていくかということを考えます。

そして3つ目に、私たちはできる限りのことを本当にやっているのかどうか、地域側で本当に協力しているのかどうか、そしてニーズに応えているのかどうかということです。本当に大学として協力するような機会を求めているのかどうか、そして、本当にその形で業界の優先課題に取り組んで、学生とか全体の地域を前進させようとしているのかどうかということです。もしかしたら、さまざまな機会とか、組織とは連携していないかもしれません。それに関しては、安心してないかもしれない。しかしながら、今まで安心できなかったことも試すべきではないかと思います。もしかしたら、多くの協働関係があるかもしれませんが、もっと違った形で協力することによって、みんながメリットを享受できるものにしていく必要があるかもしれません。

このような3つに応えることができたならば、成功すると思っています。また、地域ファーストをその業界がけん引するような形にして、非常にクリエイティブで効果的な形で、横断的な形で、突破口をひらきながら、物事を違ったやり方で協力をしていくということが必要だと思います。

私の経験では、特にこういうことをやっているところでは、みんながメリットを享受しています。そこには、大学機関も含まれます。大学の伝統的な形ではないかもしれませんが。しかしながら、地域で、強い連携をもってやっている大学は、資金的にも強くなるし、グローバルな競争力ももつようになる。そして、彼らの名声も高くなっています。そして、彼らは有能な教員を採用することができ、技術開発も増えることになります。大学が地域に協力する場合は、ゼロサムゲームではありません。大学がやりたいことだけにフォーカスするところは負けています。実際に、突破口を開くことができません。

ですから、COC+によって、みなさんはこのような協働を試す機会があると思っています。一晩でミラクルが生まれると思ってはだめです。さまざまな取り組みや作業をしなければいけない。もちろん、私の意見と一致しない方たちもいると思います。でも、世界中の突破口をひらいた事例を見てほしいと思います。かなり多くの事例があります。そして、学長などにも、徐々にこれは重要だということを伝えていく。それにより、大学には大きなメリットが生まれると思います。多くの力を使うかもしれませんが、大学としてのステイタスが上がる可能性があります。その結果、長期的にみて、持続可能なものになってくると思います。

鈴木(千葉大学)

ありがとうございました。時間がそろそろ終わりに近づいていますが、今の話も含めまして、一言ずつ、お願いしたいと思います。

藪内(敬愛大学)

どうすればコロラドに戻ってくるか、そのつながりの話なのですが、隠岐島で記憶に残っている話が、島留学で大都市から3年間高校にきた女子学生が、隠岐島の海士町で保育士が不足していると聞いたので、大学を卒業したら保育士になり島に戻ってきたいということをいつているという話を聞きました。おそらくその女子学生のふるさとと呼ぶべき大都市では、そういうつながりが希薄だったんだと思うのです。初めて隠岐島で、島留学の子どもたちには島親という、島の人達が親代わりになって、それで、土曜日、寮はもちろんあるのですが、週末には島親の人の家について泊まるとか、何かそういう島親制度がある。そこで、より人のつながりを感じて、それが記憶に残って、そういう発想になるのだと思うんです。つまりつながりというのは、つくるものでもあるし、日常生活、あるいは地域コミュニティの中で守るものでもあると思います。特にアメリカの場合には、移民社会なので、最初からゼロからつくるものだったかもしれない。でも、日本はもともとあったものが今、どんどん希薄化しているという現象があるので、それをいかに回復するかということになるのではないかと思います。

ちょっと違う課題かもしれませんが、破綻をしてしまった夕張では、市民病院が廃止され、救急センターが廃止され、若い人が出ていき、年寄りたちは、仕方がないから助け合って生きていこうといっているうちに、がんの発症率も死亡率も、それから救急車の出動回数というのも、全部下がった、みんな健康になったということです。ですので、つながり指数というのが高いと健康寿命が延びるということは、どうも事実のようです。

鎌田(千葉工業大学)

大学間の連携というのは、どうしてもCOC+自体が先ほどいいましたパブリックセクターからきた課題設定にみえてしまいます。そうすると、つながりをもつこと自体が目的化をするっていうことの設定がまちがっているんだと思います。今、メルヴィルさんがいわれたように、地域ありきということを考えると、ほんとに今の夕張の話でのつながり指数が、学生と地域、もしかしたら、南房総市では、聖徳短大さんと千葉工大が一緒のフィールドでやるのですが、まだこれからつながりが増えると思います。例えばこちらがロボットをつくったり、電子デバイスをつくったり、かたや、聖徳短大さんは、大変おいしそうなケーキをつくっているわけですね、やっぱりこういう違うところが通い合うという、つながり指数が、そこで増えてくるのではないかという気がしています。

実は、聖徳短大さん、千葉県下のすべての短大さんとは、単位互換ができていますし、千葉大工学部さんともできています。あとは高専さんとも協定を結んだし、でもそれは制度や形式なんですね。本当につながるの、やっぱり地域があって、地域ファーストで、考えていくと、それはできそうだなと思います。これをやはりCOC+ではよい機会にしたいと考えます。

伊永(千葉科学大学)

COC+事業をやることによって、いわゆるパブリックセクターとも理解が深まるし、それから産業界にも理解されると、さらには市民の中でも分かっている方も増えてきた。しかしながら、では大学生自身がCOC+の意義を本当にわかっているかということ、大学に対して保護者や学生が希望して来てくれる呼び水にはなかなかかなりにくいという実態があります。COCがあるからあの大学に行くんだということにはまだつながらない。こういうことがさらに大学の中で、COCを学生(特に、高校生)が関心を持つようなブランディングに役立つというようなことにつなげていくには、メルヴィルさん、何かアドバイスがありましたら、お伺いしたいのですが。

John Melville

目に見える成功がでてきて、業界の機会を高められれば、それをマーケティングに活かすことができと思っています。まず地域ファーストにしているということ、それを業界が先導していること、そして、業界と協力をしているということは、大きなストーリーになると思います。

国際的にみても大きなストーリーになるとしています。正しくやることによって、うまくいくと思っています。それは、プロモーションという意味でもうまくいくと思います。そして、多くの若者がその大学に行きたい、そして多くの若者がその地域に留まりたいということになってくると思います。

野中(聖徳大学短期大学部)

メルヴィルさんのお話を聞きまして、改めて、魅力があるという情報を発信していくことの大切さを痛感いたしました。私は、今から50年近く前に四国の高知からこちらへでてきました。もし、それからずっと高知とのつながりがあれば、なんらかの情報があれば、魅力的に感じて、もう50数年前にそちらの方へ帰っていたかもしれないなということを、いま聞きながら思いました。

いずれにしても、これから千葉工業大学、鎌田先生それから今日、南房総市、黒川課長もお見えになっていますが、ぜひ一緒に頑張って、魅力をつくり、そして情報を発信していきたいと思っています。

大枝(木更津高専)

今日、具体的な効果的な宣伝の方法ということで、卒業生、それから重役になっている卒業生もいると思いますので、早速もう明日からやっていこうかなと思いました。芽がでるのはかなり先だと思うんですが、やれることは早速やっていこうかなと思います。それから、言葉の中であったとおり、千葉ファースト、地方創生ですから、千葉にブランド力がでてくるならば、東京ディズニーランドじゃなくてたぶん千葉ディズニーランドになるでしょうし、東京ドイツ村もたぶん千葉ドイツ村になるはずなのです。どうしても東京というブランドが強いですから、私たち、地域が活性化して、ブランド力を高めて行きたいと思います。

鈴木(千葉大学)

ありがとうございました。残念ながら時間になってまいりました。最初の基調講演から含めまして、COC+を進めるにあたって、大変有意義なお話をうかがえたと思います。それぞれの言葉が強く、インパクトがあるというのが私の印象でした。私と同年代の方が、こんなに非常に強い言葉で語り、まさに実践しているということに非常に感動いたしました。私もこういう人になりたいという気持ちにもなりました。メルヴィルさんどうもありがとうございました。そして、各先生方どうもありがとうございました。これにてパネルディスカッションを終わりにしたいと思います。

付録

COC+

地(知)の拠点大学による地方創生推進事業とは

文部科学省 地(知)の拠点大学による地方創生推進事業

地域で活躍する人材の育成や大学を核とした地域産業の活性化、地方への人口集積等の観点からは、地方大学が果たすべき役割には、極めて大きな期待が寄せられている。

平成 25 年度から「地域のための大学」として、各大学の強みを生かしつつ、大学の機能別分化を推進し、地域再生・活性化の拠点となる大学の形成に取り組んできた「地(知)の拠点整備事業(大学COC事業)」を発展させ、地方公共団体や企業等と協働して、学生にとって魅力ある就職先を創出・開拓するとともに、その地域が求める人材を養成するために必要な教育カリキュラムの改革を断行する大学の取組を支援することで、地方創生の中心となる「ひと」の地方への集積を目的としている。

対象となる事業は、地域で活躍する人材の育成や大学を核とした地域産業の活性化、地方への人口集積等を推進するため、地域における複数の大学が、地域活性化政策を担う地方公共団体、人材を受け入れる企業や地域活性化を目的に活動するNPOや民間団体等と協働し、当該地域における雇用創出や学卒者の地元定着率の向上を推進するものである。特に大学においては、地域が一体となって、雇用創出や地元就職率の向上に取り組むとともに、その地域が必要とする人材を養成するための教育カリキュラムの構築・実施に取り組むこととしている。

地(知)の拠点大学による地方創生推進事業 ～地(知)の拠点COCプラス～

平成27年度予算額 44億円[新規](旧COC事業平成26年度予算額 34億円)

【背景・課題】

人口減少を契機に、『人口減少が地域経済の縮小を呼び、地域経済の縮小が人口減少を加速させる』という負のスパイラルに陥ることが危惧されている。
地方/東京の経済格差拡大が、東京への一極集中と若者の地方からの流出を招いている。特に、地方圏から東京圏への転入超過は、大学入学時及び大学卒業・就職時の若い世代に集中。

【事業概要】

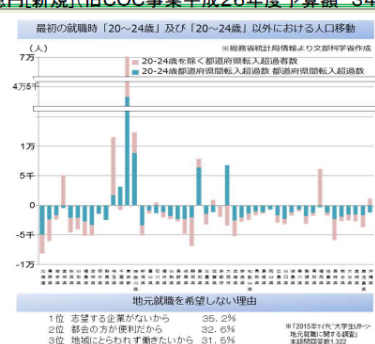
地方の大学 … 地域の自治体や中小企業等と協働し、**地域の雇用創出や学卒者の地元定着率の向上に関する計画を策定**(自治体の教育振興基本計画等へ事業期間中に反映)
東京等の大学 … **地方の大学や自治体・中小企業等と協働し**、地方の魅力の向上に資する計画を策定(協働する自治体の施策等へ事業期間中に反映)

- COC事業の要件を満たした大学が、地域と協働し、**地域を担う人材育成計画を実現するための教育改革を実行**
- COC推進コーディネーターを活用し、都道府県内の他大学や自治体、企業等の**連携先(事業協働機関)を拡大**

→ 事業協働機関が設定した目標達成のため、大学力(教育・研究・社会貢献)を結集
※ COC大学は事業協働機関に参加することが事業継続の条件

【支援内容】

地域活性化政策を担う自治体、人材を受け入れる地域の企業や地域活性化を目的に活動するNPOや民間団体等と協働して、地方を担う人材育成に取り組む大学が**COC推進コーディネーター**の活用等により、地方創生を推進・拡大する取組を支援。

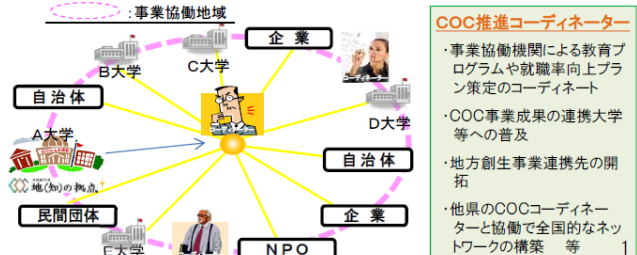
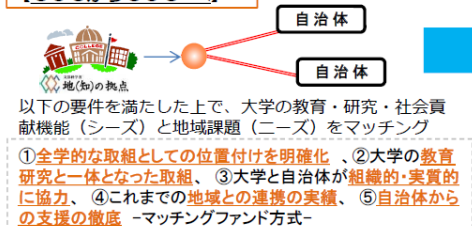


【成果】

- ・事業協働地域における雇用創出
- ・事業協働地域への就職率向上

↓
若年層人口の東京一極集中の解消

【COCからCOC+へ】



概要 説明

千葉のCOC+概要

事業責任者 千葉大学 上野 武

COC+事業の責任者をしております、千葉大学の上野です。私達は、「都市と世界をつなぐ千葉地方圏の“しごと”づくり人材育成事業」を推進しています。この事業は、昨年度、平成 27 年度に採択されたもので、本日のシンポジウムもその事業の一環として位置づけられています。

千葉大学が幹事校となり、本日会場を提供いただいている千葉工業大学、敬愛大学、木更津工業高等専門学校、聖徳大学短期大学部、千葉科学大学を参加校として、放送大学、城西国際大学、日本大学生産工学部、千葉県内の大学・高専 9 校がこの事業を進めています。

連携いただいている自治体を右側に示しました。千葉県庁とともに、横芝光町、いすみ市、勝浦市、長柄町、南房総市、御宿町、銚子市、館山市、木更津市、鴨川市、東金市、山武市の 12 の市と町が、連携してこの事業に取り組んでまいります。各自治体では、人口減少を食い止めるための「総合戦略」の中に、COC+での協働を明記いただいています。さらに、下の欄にお示した、32 の企業、NPO 法人、団体、高校のご協力とご支援をいただいています。時間の関係ですべてのお名前をご紹介しますが、お手元のパンフレットでご確認いただければと思います。

このスライドは、文部科学省が「地(知)の拠点大学による地方創生推進事業」(いわゆる COC+事業)を募集した背景と、事業が求める内容を示したものです。東京への一極集中が進み、地方から若者がどんどん流出している状況を食い止めるために、地方の大学が、地域の自治体や企業、NPO と協働して、地域の雇用をうみだし、若者の就職率を高めるための方策を作っていくというものです。大学には、地域が求める人材を育成するための教育改革と、推進コーディネーターの配置が求められました。COC+事業に先立って平成 25 年度から募集された、「地(知)の拠点整備事業」に採択された大学は、引き続きこの COC+事業に加わる事が求められました。

ここにお示した千葉県全体の図の内、色のついた部分が事業協働地域です。千葉大学と敬愛大学は、左側で白くなっている東京に近い都市圏で、「地(知)の拠点整備事業」COC 事業を実施してきました。COC 事業と COC+事業の二つが合体することで、千葉県全体の問題をカバーすることができるようになりました。色のついた部分は、千葉県総合計画で4つに分けられています。空港ゾーン、香取・東総ゾーン、圏央道ゾーン、南房総ゾーンの4つで事業を推進していきます。さらに、横芝光町、いすみ市、勝浦市を事業重点地域として、ハブオフィスを設置しています。若年人口の減少、少子高齢化、地域産業の後継者不足、地域経済の縮小と衰退をくいとめるために、地域産業にイノベーションを興す「地域産業イノベーション人材を育成」することを、目標としています。海と山に囲まれ、都市と農山漁村が共存する房総半島にある千葉県は、産業構造や地理的特徴が日本の縮図といえるのではないのでしょうか。私達が推し進める事業が、日本の地方創生の先進モデルとなるように、頑張っていく覚悟です。

「都市と世界をつなぐ千葉地方圏の“しごと”づくり人材育成事業」の概念を図に示しました。都市部や大学にある研究のシーズを、地域に持って行き、6 次産業化、インバウンド観光、メディカル連携などをキーワードとした新しい産業を地域に興し、ローカル・イノベーションが集積し

た強みによって、世界を視野に入れた地域産業へと繋げていくことを目指しています。

もう少し詳しく説明したのがこの図です。「地(知)の拠点」としての大学と地域を結ぶ、ローカル・イノベーション・コンソーシアムを組織します。ここで、地域のニーズと大学の研究シーズをマッチングしていきます。ローカルベンチャー企業や、いくつも地域で生まれることで、ローカル・イノベーションが集まった町としていくことを目指しています。世界展開や、アジア諸都市への課題解決支援などにも繋がっていけば、大学と地域が互いに発展する好循環が生まれるのではないのでしょうか。具体的な事例については、パネルディスカッションの中でご紹介していきます。

この事業は、参加大学がそれぞれの特長を活かして、連携する自治体と一緒にプロジェクトを進めていきます。様々な活動の情報を共有し、互いに補い合いながら、大きなパワーを発揮するために、参加校、参加自治体が一堂に会することができる組織体が必要です。そこで、大学連携地方創生推進会議を設置しました。第1回の会議では、大学の教育プログラムの開発状況と、参加自治体におけるコンソーシアムの設立状況などについて、情報を共有し、個別プロジェクトに活かすことができるようにしています。最後に、ここに示した参加校の活動の概要をお話したいと思います。

まず千葉大学です。重点地域である、横芝光町、いすみ市、勝浦市にローカルハブの設置を完了しました。ここで、6次産業化、インバウンド観光、メディカル連携を包括的に推進し始めています。また、長柄町でメディカル連携を中心とした取組を開始して、コンソーシアムをつくりました。

敬愛大学では、成田市、空港関連企業と連携して、エアポート NARITA 地域産業学という副専攻をつくりました。受講者が企業へのインターシップを経験することで、地域企業への就職率向上を図ります。空港発の地域産業振興につなげていくこと目指しています。

千葉工業大学は、御宿町と連携して、外房の歴史や自然と、最先端技術とを融合させた、賑わいのまちづくりや、子供たちからアクティブシニアが楽しめる遊び場をつくる試みを検討しています。

千葉科学大学は、銚子市と連携してエクステンションセンターを開設しました。ここで郷土教育講座や、防災士資格取得講座など、地域産業振興や若者定着に役立つ講座を開設しています。

聖徳大学短期大学部は、南房総市と連携しています。ここに千葉興業銀行や地元企業が加わって、地域農産物を活用した新商品開発を行っています。千葉で作って千葉で消費する、千産千消を推進しています。

木更津高専は、木更津市と連携しています。市民交流をサポートするみなまちブックカフェの活動を実施しました。また、植物工場の計測・制御システムの開発や、情報セキュリティ人材育成を通じて、地域産業にイノベーションをおこそうとしています。

後で行われるパネルディスカッションで、さらに詳しく紹介があると思いますので、楽しみにいただければと思います。

以上が、千葉県における COC+事業の概要です。

地(知)の拠点大学による地方創生推進事業(COC+)

都市と世界をつなぐ 千葉地方圏の“しごと”づくり人材育成事業



CHIBA UNIVERSITY
千葉大学

敬愛大学 木更津工業高等専門学校 千葉工業大学

聖徳大学短期大学部 千葉科学大学

放送大学 城西国際大学 日本大学生産工学部



千葉県

横芝光町 いすみ市 勝浦市 長柄町

南房総市 御宿町 銚子市 館山市

木更津市 鴨川市 東金市 山武市

日本政策金融公庫 千葉銀行 京葉銀行 千葉興業銀行 サイボウズ マイファーム 千葉日报社 千葉テレビ放送
成田空港活用協議会
横芝光町商工会 向後米穀 理想郷 アクセルコミュニケーション NPO法人TINA 合同会社SOZO
リゾートソリューション マザアス R.project リソル生命の森
自然と共生する里づくり連絡協議会 NPO法人いすみライフスタイル研究所 いすみ市商工会 港の朝市運営委員会
夷隅東部漁業協同組合 いすみ市耕作放棄地対策協議会 千葉県タクシー協会外房支部 いすみ市観光協会 いすみ鉄道
勝浦市商工会 ONE勝浦企業組合 横芝敬愛高等学校 千葉県立安房高等学校

地(知)の拠点大学による地方創生推進事業(COC+)

「都市と世界をつなぐ千葉地方圏の“しごと”づくり人材育成事業」

地(知)の拠点大学による地方創生推進事業(COC+)について

概要

■背景・課題

『人口減少が地域経済の縮小を呼び、地域経済の縮小が人口減少を加速させる』という負のスパイラルに陥ることが危惧されている。

地方／東京の経済格差拡大が、東京への一極集中と若者の地方からの流出を招いている。

■国の事業概要

地方の大学…地域の自治体や中小企業等と協働し、
地域の雇用創出や卒業者の地元定着率の向上に関する計画を策定

- ・大学が、地域の各種機関と協働し、
学生にとって魅力ある就職先を創出・開拓するとともに
地域が求める人材を育成するための教育改革を実行
- ・COC+推進コーディネーターを配置し、
事業協働地域の連携強化や取組の進捗を管理



事業協働機関が設定した
目標達成のため、
大学力(教育・研究・社会貢献)
を結集

※COCからCOC+へ 目的が変更
COC : 地域再生・活性化の核となる大学の形成
COC+ : 若年層人口の東京一極集中の解消

■成果

- ・事業協働地域における雇用創出
- ・事業協働地域への就職率向上

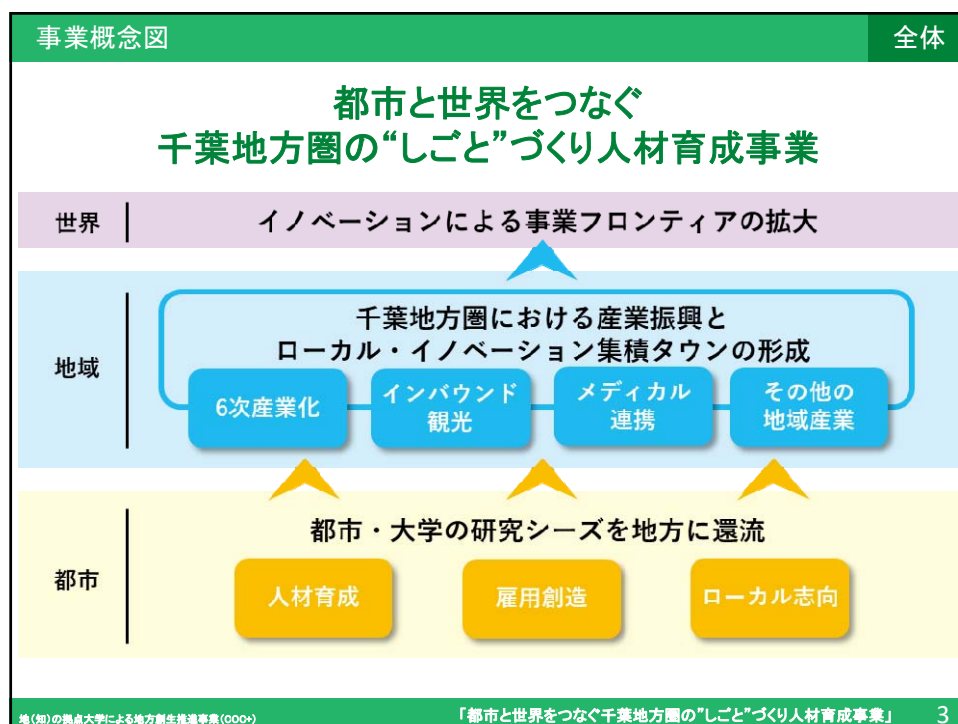
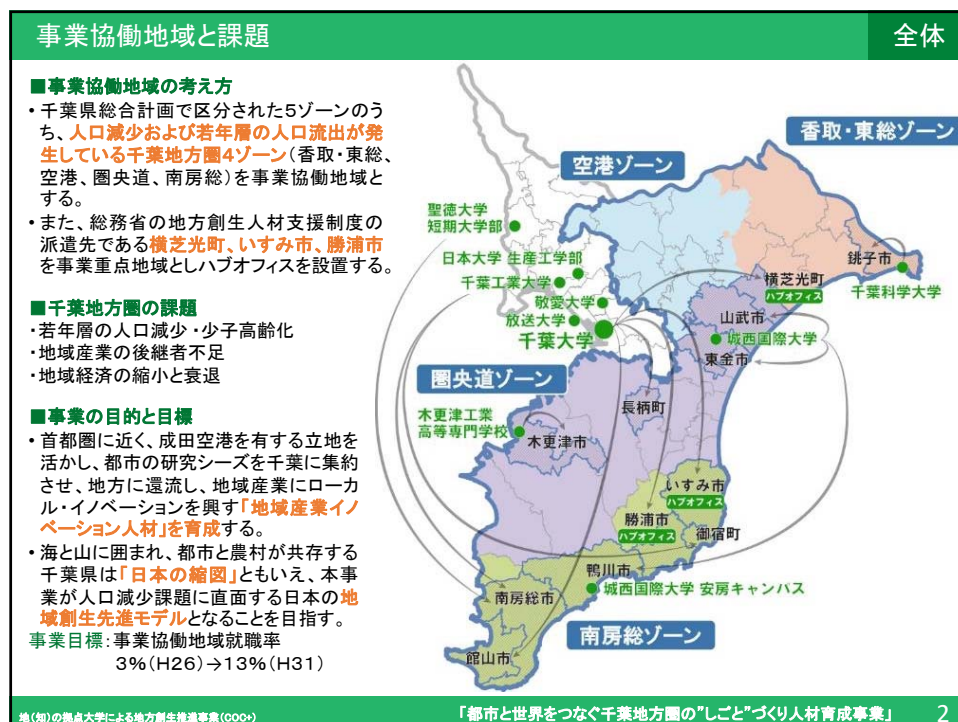
若年層人口の東京一極集中の解消

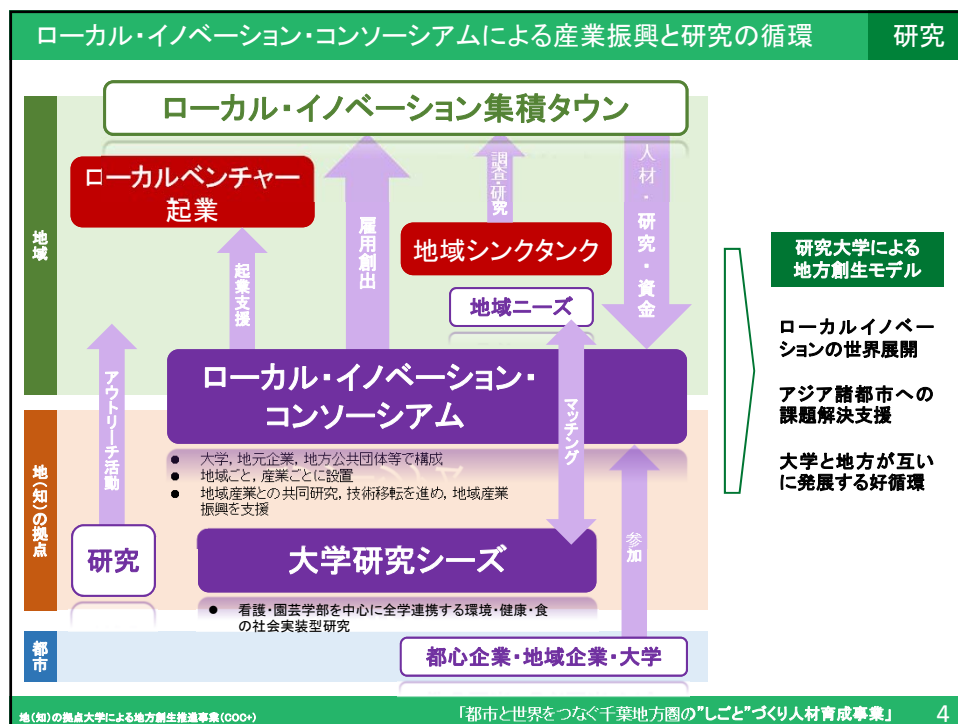


地(知)の拠点大学による地方創生推進事業(COC+)

「都市と世界をつなぐ千葉地方圏の“しごと”づくり人材育成事業」

1





参加大学の取組



千葉大学

- ・横芝光町、いすみ市、勝浦市にローカルハブ設置
- ・6次産業化、インバウンド観光、メディカル連携を包括的に推進
- ・長柄町、館山市でのコンソーシアム形成



敬愛大学

- ・成田市、空港関連企業との連携
- ・エアポートNARITA地域産業学（副専攻）
- ・インターンシップ
- ・空港発地域産業振興



千葉科学大学

- ・銚子市との連携
- ・エクステンションセンター開設
- ・郷土教育講座
- ・防災士資格取得講座
- ・産業振興、若者定着



千葉工業大学

- ・御宿町との連携
- ・外房の歴史・自然と、最先端技術との融合
- ・賑わいの町づくり
- ・多世代の遊び場づくり



聖徳大学短期大学部

- ・南房総市との連携
- ・千葉興銀、地元企業との連携
- ・地域農産物を活用した新商品の開発
- ・千産千消活動への協力



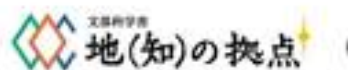
木更津工業高等専門学校

- ・木更津市との連携
- ・市民交流サポート
- ・みなまちブックカフェ
- ・植物工場計測・制御システム開発
- ・情報セキュリティ人材育成

千葉県COC+
シンポジウム



大学と共に創る
明日の千葉県



シンポジウム「大学と共に創る明日の千葉県」
講演＋パネルディスカッション記録集

2017年3月20日発行

責任編集：千葉大学コミュニティ・イノベーションオフィス